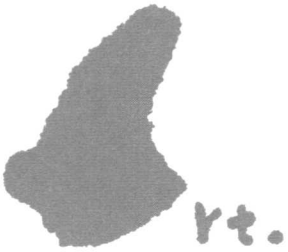
rt.



はじめに

桑島 紳二

淡路島に住むアーティストを訪ねるようになって5年くらいになるだろうか。たまたま訪れたアート山大石可久也美術館に惹かれ、大石画伯ご夫妻とボランティアの方々へのインタビューを学生たちの力を借りて行い、その成果を「海抜六四メートルの楽園　アート山大石可久也美術館の魅力を探る」という報告書にまとめた。インタビューや原稿のやりとりで明石海峡大橋を行き来するようになり、島には伝統芸能から現代アートまでいろんなアーティストが活動していることが分かった。その中にはギャラリーやカフェもやっているアーティストがいて、あちこちおじゃました。

カフェといえば、街中にはスターバックスといったチェーン店のカフェが多くなり、「純喫茶」といった昭和的な佇まいの喫茶店はめっきり少なくなってしまった。淡路島のアーティストたちのカフェは、ならではのセンスで昭和の建築を巧みにコンバージョンし、さほど改装におカネも掛かっていないようだが、実に個性的なのである。こんなカフェが町中にあればきっと話題になるはずだが、いくぶん寂れた町の生活道路から細い路地を曲がったところとか、標識もない山道を登っていったところとか…。都会の過剰サービスに慣らされた感覚からすると、どこも不便でわかりにくい。迷った末、田舎の景色の中に突然現れるアートな

カフェ。その非現実的な組み合わせが「注文の多い料理屋さん」のような感じなのだが、ドアを開けてみるとけっこうふつうにお客さんが入っている。地元のお客さんだけではなく、橋を渡ってくる人もいれば、時には東京の有名大学の建築学科の先生や学生が視察にもやってきたりと、まるで秘境のようだ。しかし、「こんなところで成り立つわけがない」とかさんざんまわりに言われながらも、なぜアーティストはカフェをするのだろうか？　そしてどんなひとが、なぜわざわざ淡路島にあるアーティストのカフェに来るのか。そのあたりにも関心があり、カフェやギャラリーを設けておられるアーティストに登場していただいた。

また、アートの支援活動というあまり表に出ない仕事をされている淡路島アートセンターのやまぐちさんにセンターの活動について語っていただいた。宇田賀さんはあまりに素敵なお住まいを見て、お話を聞きたくなりご協力いただいた。

早いもので、インタビューをはじめてからほぼ一年が経とうとしているが、振り返ってみればひじょうに学ぶべきことの多かった二年だった。それもこのプロジェクトがきっかけのような気がする。「現場で人の話を聞く」ことの大切さをあらためて思い知った。ここにご協力いただいた皆様にお礼申し上げます。

2012年4月

contents

2p　はじめに

6p　楽しく生きるために
工房風南 遊木真帆さん

16p　見えてるのに見えてない、
それを気づかせる　ノマド村 茂木綾子さん

24p　気持ちひとつで、
誰でもアーティストになれる　発明工房 尾崎泰弘さん

32p　生活と芸術はそもそもひとつ
淡路島美術大学 岡本純一さん

40p　楽しく生きるための手立て
ギャルリBANYA 前川和昭さん・温子さん

46p　こころを満たしてくれる
うつわ織 宇田賀織絵さん

52p　人を温かくする品のあるもの
樂久登窯 西村昌晃さん

58p　淡路島を耕す
NPO法人淡路島アートセンター事務局長　やまぐち くにこさん

66p　なぜ淡路島のアーティストは
カフェをするのか？　桑島紳二

インタビューは2011年6月に実施しました。

明石海峡大橋
淡路市
●アート山 大石可久也美術館
●工房風南 淡路市釜口
ノマド村●
淡路市長澤
●ナフシャ 淡路市生穂
●淡路島美術大学
淡路市志筑(関西看護医療大学内)
●ギャルリ番屋
洲本市安乎平安浦
うつわ織●
洲本市中川原町安坂
樂久登窯●
洲本市五色町鳥飼浦
●淡路島アートセンター
洲本市本町
神戸淡路鳴門自動車道
28
洲本市
鳴門海峡
南あわじ市

楽しく生きるために

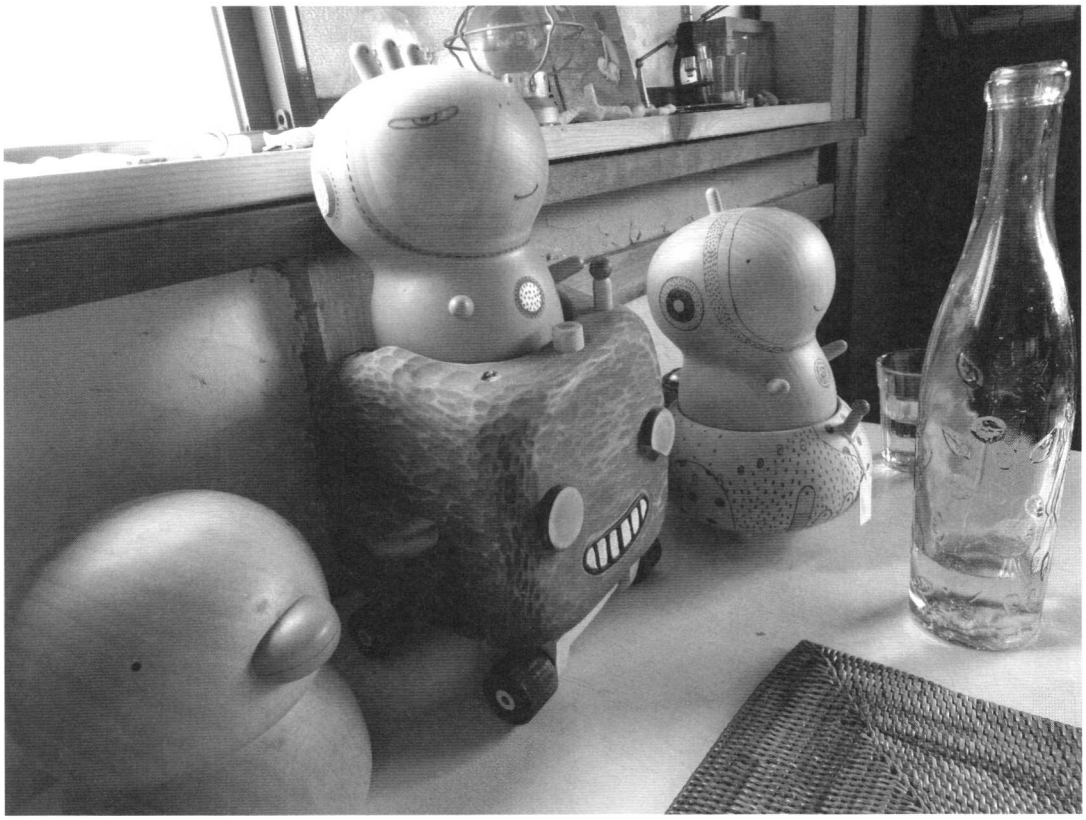
工房風南 遊木真帆さん

インタビュアー 三宅礼夏・森下奈津子

遊木　真帆

1969年　兵庫県神戸市生まれ。名古屋芸術大学美術学部彫刻科卒業。
1988年～2000年　個展、2人展、グループ展、アート・イベント他に作品発表
2001年　[工 房 風 南]設立。遊木真帆のイラストを元に立体化したオブジェを軸に作品展開。
雑貨店、雑貨カフェ他11店舗にて委託販売。アート・イベント、露天アート・マーケットに多数出店。
ギャラリー、カフェ、雑貨店、公共施設他で展覧会開催。
2005年　[工 房 風 南]の活動を休止し、個人活動に戻る。
2007年　神戸市へ移住。
2010年　淡路島の釜口にてカフェを併設した工房を設け、[工 房 風 南]の活動を再開する。
2011年　家族で淡路島に移住。

工房風南　http://blog.fuunan.net/



うちゅうちゃん

六月某日。小雨が降るなか、のどかな田園風景の中に大きな観音様が見えてきた。そこを通り過ぎると、壁に不思議なうずまき模様が描かれた建物。少し早い到着だったにも関わらず、遊木さんは快く私たちを迎え入れてくれた。和やかな雰囲気のなか、冷たいレモンティーをいただきながらインタビューが始まった。

「うちゅうちゃん」は私の原点。

—このかわいい木彫の作品について教えてください。

この子は「うちゅうちゃん」っていうんですけど、私の原点ですね。基本的に丸いものが好きなんです。おはじきとか、ビー玉とか、子どもの時からとにかく丸いものにすごく執着があって、いろいろ集めてました。海に行ってビーチガラスとかも拾うけど、一時期はひたすら丸い石だけを千個くらい拾って、それを材料としてインスタレーションしていたんです。

—「うちゅうちゃん」ってこの丸い感じがすごくかわいいですよね。

なんか安心するでしょ？　みんなよくこうやって触っていくんですよ（笑）。

—なるほど（笑）。この木目もいいかんじですね。

イチョウの木なんです。イチョウはやわらかいし色がきれいだし年輪の出方がきつくないんです。イチョウって太古からあまり形を変えずに残っている木らしくて、その強さがいいなぁって。違う種類の木を組み合わせて試してみたけど、やっぱりイチョウがいちばんだなぁと。

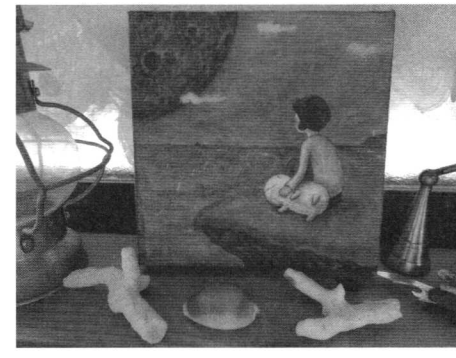
—工房の外にいる大きいうちゅうちゃんは？

イベントでちょくちょく会って仲良くなった石屋さんが、うちゅうちゃんをすごく気に入ってくれて、『等身大うちゅうちゃんを作らせてくれないか』と言って、表にあるふたつを作って

くれました。

―木工はいつからされているんですか？

私自身、やってたわけでありません。たまたま木工をやっていた元パートナーが、私がデザインして図面を引いたものをもとに木を削ってくれていました。仕事でイラストも描いているのですが、私が創作したキャラクターをもう少し発展させて、ビジネスにするためにはどうすれば効率よく売れるか、ターゲットの年齢層はいくつぐらいかとか、いろいろ考えて作ったのが「うちゅうちゃん」。昔はこれをアートイベントに出したり、雑貨屋さんに置いてもらったりして、何千個も作って、その売上げで生活していました。ペアを解消したので今は木工ができないから、作ることができないんですけどね。ということで「うちゅうちゃん」は商品として作っていたので、芸術という点から見れば、「作品だけど純粋な作品じゃない」んです。



―ということは企画とキャラクターデザインをされたんですね。

そうです。作家としての私は、鉄工所に行って鉄クズをいっぱいもらってきて、それを錆びさせて作品を作ったりしてました。クギとかもそうなんですけど、子どもの頃からピカピカしたものより錆びたものの方がすごく好きなんです。木も流木や廃屋のボロボロになった柱とか椅子とか壁とか、朽ちたものがすごく好きですね。それを組み合わせたり削ったり加工して作品にするのが主だったの。丸太を二本買ってきて彫刻にするっていうのは授業でやったことはあったけど、自分の作品としては作ったことはないですね。

ここに住みたいと思ったのは、淡路島だけ

―淡路島がとてもお好きなようですが？

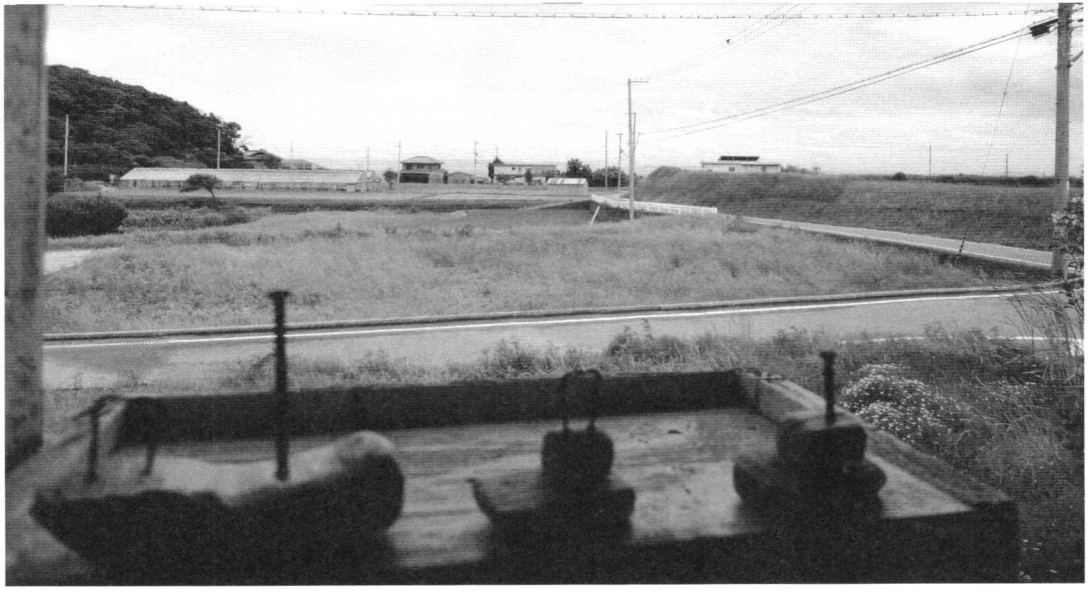
幼いころから淡路島の北の端の対岸にある垂水区の舞子に住んでいたんです。夏休みには毎日のように西舞子の海岸で泳いでいて、海の向こうにはいつも淡路島が見えていた。友達と淡路島に海水浴に行ったので、非常に身近に感じていました。でも、大学は愛知の内陸の方にあるところに進学して…。海があるのが当たり前だったので、突然海のないところに引っ越して、「海って大事なんだな」と気がついて。私にとっては海は必要不可欠なんだなと思いました。なぜ淡路島かと言うと、住みたいところを探しに日本中を旅してまわったんですけど、そう思ったのは淡路島だけだったから。「淡路島のどこが良かったんですか」ってよく聞かれるんですけど、頭でどうこう考えるんじゃなくて、淡路島だけはしっくり、ピタッときた。

―いろんなところに行ったから、よけいにそう感じたんですね。

そうそう。実は屋久島にも行ったんですよ！

―屋久島ですか!?（笑）

屋久島移住計画っていうのを子どもがまだ二人とも赤ちゃんだった頃に考えて見に行きました。それで、三日ぐらい物件を案内してもらったりしてたんですが、最終的にあそこはちょっと住む場所じゃないなと（笑）。それからいろいろあって、ちゃん



と生きていこうと思った時に、もう一度淡路島に来てみたら、「やっぱりここに住みたい」と思ったんです。本当はもっとおばあちゃんになってから淡路島に、とも思っていたんですが、子どもって頭でわかることより、小さい頃に体験したことの方がよく覚えているので早く引っ越すことにしました。もうひとつの理由としては、自分の人生を考えたときに、「このままこの神戸の団地に住んでたらアカン」って思って。その頃やってた仕事は、帽子を作る会社でミシンを踏み続けることの繰り返しで、モノづくりはモノづくりなんですけどね…。私はこれがやりたいわけじゃないなぁと思って、やりたいことができる環境を探したら、見つかったのがここだった。

—やっと淡路島に来ることができた！　という時に、どういうことを思いましたか？

上の子が「中学卒業までは神戸にいたい」って言ったので、それを待つために一年間、平日は家族で神戸、休みの日はひとりで淡路島という生活をしていました。その生活は金銭的にも時間的にもきつかったので、今年の四月に引っ越して来た時はとにかくほっとした。まだ落ち着いてはないんですけど、通う必要がなくなったので気分的には楽ですね。住民票を移した時点で「島の人」なので、近所の人たちもすごく喜んでくれました。一年間通ってた間、本当に親切にしてくれていたので、春の村の集会で「よろしくお願いします」とあいさつした時には「やっと来たな」と言われて。引っ越ししてこんなに歓迎されたのは初めてだったので、とてもうれしかった。

—一年間通ったおかげだったんですね。

通い始めたころ、お金もなくひとりで作業していたら、「ねえちゃん何やっとんけ」って近所の方に声を掛けられて、それがどんどん広がっていって。だんだん興味を持って手伝ってくれる人が出てきたり、食べ物をくれたりする人が増えてきて、自分で作業をすることで村の人たちと交流ができたなぁって。

—こういうところでなにかをしようと思ったら、ご近所さんに受け入れてもらわないと難しいですよね。

それがなかったらできないと思うし、それしかないと思いました。

—淡路島のどこが好きですか？

のんびりしているところです。他にもそういうところはあるんだろうけど、この辺りの人はみんな「釜口だけ昔の風情のまま残っとるね」って言います。街のほうは賑やかに変わってしまって、昔の風情はあんまり残ってないんですけど。ここはあまり人工物もないし…、観音様が唯一すごい人工物だけど(笑)。でもうちの目印だから、あってもらわないと困りますね。それから、島をぐ

るっと一周したら創作のための材料集めが簡単にできます。車でずっと海岸沿いや山に行くんですけど、流木も、石も、貝殻も落ちてて、それを拾ってても誰も何も言わないし。持って帰って、「やっぱいらんわ」って思っても元あったところに戻せばいいし。神戸の海で「やっぱこの流木使えんな」と思って返しに行ったら、「ゴミ捨てんな！」ってすごい怒られたことがあったんですよ（笑）。いや、戻しにきただけなんです…って（笑）。そうそう、大学時代もわざわざ車で一時間くらいかけて海まで行って、流木を拾ったり、砂を持って帰ったり、山にも行って木の実とかいろいろ拾っていましたね。

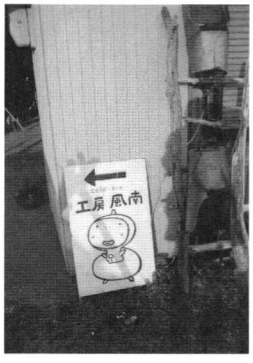
―じゃあ淡路島は山もあるし海もあるしで。

そう、両方あるからとてもいいでしょう？　まだ私もあまり道がわかってないとこもあるけど、地元の人が「あそこ行ったらこんなん落ちとるでー」って教えてくれたり、松ぼっくりとか木の根っことか拾ってきてくれたりするんですよ。

―淡路島に来てから創作活動になにか影響はありましたか？

ここに来て変わったことは、みんなで作るようになったことですね。今までは全部ひとりでやっていたんですけど、ここに来てからはいろんな人が来て手伝ってくれる。「今度こういうことするから一緒にやらない？」と言ったら、参加してくれたり、材料を持って来てくれたりする人がいるんですよ。芸術に興味があるとかないとかは関係なく、単純に面白そうと思って来てくれて、「これのどこが美術なの？　わかんない！」と言いながらも楽しそうに手伝ってくれるのが、すごくいいなぁと思います。楽しいからいろんな人と作るのか、それとも、いろんな人と作るから楽しいのかわからないけど、アートがどうとか、芸術がどうとかということはどうでもよくて、「なんかわからないけど楽しい」って、そう思うことが大事なんだと思いますね。

家の外壁の絵を描くときも村の子どもたちが来てくれました。普通は「よその家の壁に落書きしちゃダメ！」って怒られるけど、私自身もそういうことを思いっきりやりたかったので、私の夢も叶ったし。子どもたちもわいわい楽しそうにやってくれましたね。大人がダメだというようなことでも「アート」というフィルターを通したら、悪いことも楽しいことに変わりますよね。



―月に一度、「満月カフェ」というのをされているそうですが？

満月カフェを始めたのには二つ理由があって、ひとつはこの辺は街からちょっと離れているから、遅くまでお酒を飲んでわいわいできるところがなくて、そういう要望があったんです（笑）。もうひとつは、普段は生活のためにペンキ塗りの仕事をしているのですが、忙しくて…。お店は日曜日だけしか出せないので、何か他のことをしたいなぁって思ったんです。そこでカフェより少し踏み込んで、お酒も出して、知らない人でも誰でも一緒に楽しくできたらいいなって思って。

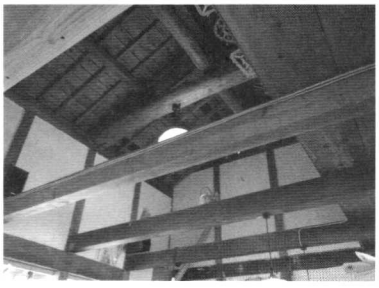
―淡路島って星とか月がよく見えそうですよね。

よく見えますよ！でも私は雨女だからか、満月カフェをやろうとしたら雨が降っちゃうんです（笑）。満月カフェっていうより『ほぼ満月カフェ』になってしまうんですよ（笑）。

好きなことをして、気持ちのいい暮らしを

―淡路島で家を探された時、この小屋を見てすぐここに決めたとお聞きましたが。

淡路島を反時計回りに一周して物件を探していて、最後に訪れたのがここだったんです。当時は淡路島に友達も親戚もいないし、ツテも何もないから、不動産屋さんと役場でいろいろ紹介してもらいました。でも、「店を開いていい、改造もしていい、作品を作るから音も出していい」という三つの条件があったので、



なかなかその条件をクリアするところがなかった。それでたくさん回って、最後に行った不動産屋さんが教えてくれた物件がここだった。この小屋なら、店を開いてもいいし改造してもいいし。周りに家がないし、裏は大工さんの作業場だから音をいくらでも出していい、ということで条件にぴったりでした。それで「もうここにしよう」と思って。外から見たら普通の平屋なのに、中に入ったら屋根裏部屋があったんです！あと、この天井の屋根の梁もすごく気に入りました。

―改造にこだわった理由とは？

自分が住むとこは自分の好きなように、住みやすいようにしたかった。団地って改造できないでしょ。あと、部屋が四角じゃないですか。外観も四角いけど、部屋の隅が四角いのがどうも苦手なんです。改造できたら自分の好きなようなとこに住めるから、居心地がいいですよね。それに、好きじゃない景色を毎日見て過ごすって嫌じゃないですか。淡路島に引っ越そうと決めた時点で嫌なことはしない、好きなことだけする、気持ちのいい暮らしをすると決めて、小屋の改造を始めました。型にはめられた暮らしを我慢してするのが嫌だった。

―最初から自分の好きなように家を作りたかったんですね。

でもそれだと新築を建てればいいじゃないってなるでしょ？　だけど私は古いものが好きだから、昔の古いものがまず土台にあって、それをどんなふうに自分の好きなように改造しようかなぁって考えるのが楽しい。お金もないから、やりたいこと全部が出来るわけじゃない。でも、できる範囲内で自分の力でやった方が楽しいじゃないですか。私はこの家自体も作品と思っています。

―今の暮らしでいちばん大事にしていることは何ですか？

楽しく暮らすことですね。嫌なことは今までさんざんやってきたから、もういいやって思って（笑）。自分が楽しかったら家族も楽しくなるし、私が笑っていたら子どもも笑っているし、周りの人も楽しいし、いい循環になっていくんです。自分がとても不幸で毎日嫌な顔をして、やりたくもない仕事をしていたら、それが大事なときももちろんあったけど、それは誰も幸せじゃないなって思って。私が行きたくない仕事に行って、つまらなさそうにしていてガミガミ怒られて、子どもと顔を合わせるのは寝る前のわずかな時間だけ……。それはかわいそうだと思った。淡路島に来て、「私が幸せになればいいんだ」って気づいたんです。そうすれば、きっとハッピーはみんなに伝わっていく。

―仕事などでお忙しい中で、芸術活動をする時間はどれくらい取れているんですか？

なかなか取れないんですよ（笑）！毎日コツコツ絵を描いたりできればいいんだけど、私はどっちかっていうとまとめて描きたいタイプなのでダメなんですよねぇ。材料を集めて時間も用意して「さあ、やるぞ！」って一週間くらい他のことを一切せずに作品に打ち込むんです。

―お子さんにも芸術に触れる暮らしをしてもらいたいですか？

子どもに芸術について言ったことはないですね。私が絵を描いているのを見て「あ、面白そう」って思って、自分でも描いてみたりとか。私が粘土を捏ねてるのを見て、やりたいと思ったり…。これは芸術だからこうしなさいとか、そういうことは一切言いたくないし、私の中にもそういう気持ちはないです。子どもが淡路島の自然の中でのびのび暮らしてくれたら、芸術とかはいいんです。

―お子さんもモノ作りはお好きなんですか？

好きですねー。ゲームも友だちが来た時にはするんだけど、淡路島に来てからは、特に下の子はテレビも見ないようになったし、ゲームもほとんどしないですね。ずーっと外で遊んでますよ。自分で「鳥を落とすんだ！」って言って、パチンコを作ったり、銛（モリ）を作ったりしてます。この辺はトンビが飛んでたり、キジやウサギが歩いてたりするから、「捕まえて鍋にするんや！」って言って（笑）。今年の夏は、山に虫を採りに行こうって言ってます。神戸にいたときは、捕まえるような虫もいませんでしたから。

―外でのびのび遊ぶようになってほしかった？

そうそう。外で遊ぶのが好きっていうのもわかってたから、こっちにきてのびのびしてますね。そう

いう、自分でパチンコや銛を作ったりっていうのも、ぜんぶいっしょ。つまりそれらもぜんぶ芸術と言えば芸術だと思うんですよ。子どもが作ったからどうとかは全然関係なくて、自分で何か工夫してモノ作って、それで遊ぶのって一番楽しいからいいんじゃないかと思ってます。

―図らずしてなってほしかったようになってくれてる。

ええ、楽しそうでいいですよ。それの延長線上で絵が描きたいとか、何かもっと作りたいとか、それはそうなってもいいし、ならなくてもいいし。区切りっていうのは私の中では全然なくて。私が流木でランプ作ったりするのといっしょなんですよ。子どもが自分で遊ぶ道具を作るのも、私が流木とかで作品を作るのも、根本はいっしょなんです。だから、何が芸術でこれはアートでっていう区切りは私の中にはないんです。こういうものが日常にある生活がいいか悪いかではなくて、「うちの家ではこうなんよ」っていう。それが周りから見たら普通じゃないって言われたとしても。工業製品とかそういうものではない、手で作ったものを日常で使っていくことは大事なことだと思ってます。

―では、遊木さんがアートを通して伝えたいことはありますか?

楽しく過ごすにはどうしたらいいかと考えたとき、たまたまやりたかったことがこういうアートと呼ばれてることだった。自分でものが作りたいとか、作ったものを糧にして暮らすとか、そういうことであって、アートとして何かメッセージを伝えたいとか、そういうのは若いときはあったんですけど今はありません。若いときからずっとめざしていた暮らしというのがあって。それで日本各地を転々として、屋久島とかも行ったわけなんですけど、やっとそういう暮らしをできそうな場所が偶然見つかって。それでここに暮らすようになって、いろんな人に出

会って、いろんな人との関わり合いの中で創るっていうのは楽しいことなんだと気づきました。人との関わり合いや、子どもの反応とか、予想してなかったことがいろいろ起こって、それはとても幸せなことなんだと思いました。みんなには行き当たりばったりに見えるかもしれない。けど、目標もちゃんとあって、それに向かっている過程を今はすごく楽しんでます。やっぱりひとりで生きているわけじゃないから、みんなと関わりあって支えあって生きていって、その中で私ができることはたまたま絵を描いたりものを作ったりすることで、それがあって周りと私は関わっているだけで…。それを他人に押し付けるのはちょっと違うなぁと。

―こちらへいらっしゃってから、みんなでものを作ることを楽しいと感じるようになられたということですが、今後はどのような作品をつくっていきたいですか？

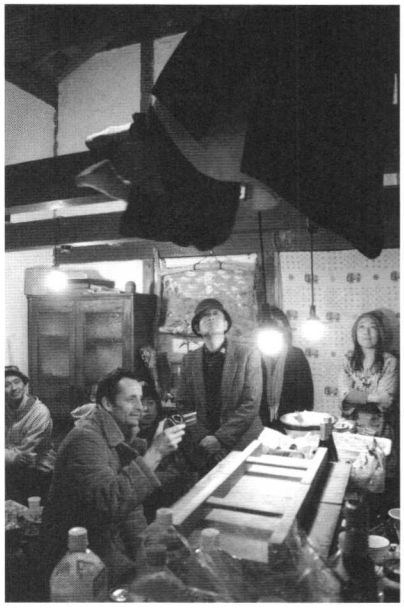
せっかく広い場所があるから、今後は時間をかけて大きいものを作りたいですね。きっとそれもみんなで作るものになるんだと思います。

―それでは最後に、遊木さんにとって芸術とは何でしょうか？

ふたつあるんですが、ひとつは「遊び」ですね。遊びと言っても、私にとっては生きていくことに深く関わっていることです。アホみたいなことに一生懸命真剣になって遊ぶから、最後にはみんなで笑えてとても楽しいんです。もうひとつは、「生きるために大切なこと」です。生きていくためにどうするかと考えたとき、決して外せない存在ですね、芸術は。

取材を始める前と後で、遊木さんの気さくな印象は変わらなかった。それは、取材の途中に訪れるお客さんたちとのやりとりを見ていたからかもしれない。常連さんでも、初めて来た人とでも変わらない態度で接し、まるで前から知り合いだった人の集まりのような、暖かい雰囲気に店内が包まれている。

現在、引っ越したばかりでまだ創作活動に打ち込めない状況ではあるが、取材をする中で遊木さんの淡路島に対する思いや信念のようなものが伝わってきた。「楽しく暮らす」という考えが生活の中心にあり、それは芸術への関わり方でもある。「楽に暮らす」のではなく「楽しく暮らす」から、大変なことも乗り越えられる。あなたにとって芸術とは、という問いに対し「生きていくために大切なこと」と答える遊木さんは、私たちが初めてじかに出会った「アーティスト」だった。



福原隆造＋グレゴール・カムニカルの舞踏（2011.2.4）

見えてるのに見えてない、それを気づかせる

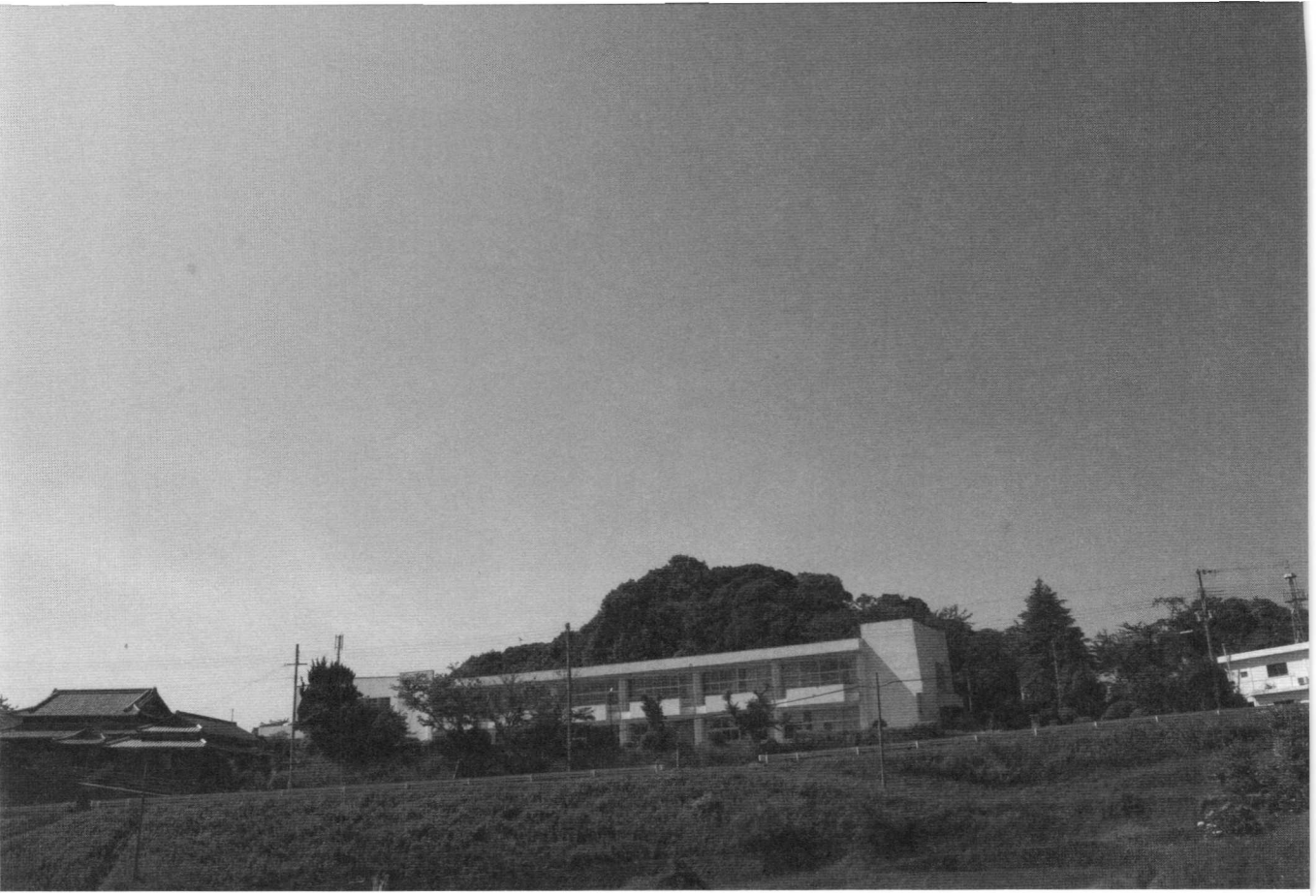
ノマド村　茂木綾子さん

インタビュアー 亀谷弥生・古賀まりあ

茂木綾子

1969年北海道生まれ。東京藝術大学デザイン科中退
1992年キャノン写真新世紀荒木賞受賞
1997年よりミュンヘンへ移住
2006年よりスイスのラ・コルビエールに暮らし、同地にてジュパジュカンパニーを立ち上げ　Laboratoire Village Nomadeアートプロジェクトの企画、運営を務める
2006年4月に渋谷ユーロスペースで「風にきく」上映
2006年雑誌コヨーテ誌上で　caravan lost を連載
2007年童話写真集「どこにいるのシュヌッフェル?」四月社より出版
2009年映画作品「島の色静かな声」渋谷シネマアンジェリカ、那覇桜坂劇場、京都シネマ、大阪第七劇場、その他各地にてロードショー
2009年より、所属ギャラリー MISAKO&ROSEN　東京
2009年より淡路島の旧小学校へ移住し、アーティストコミュニティー ノマド村を、ヴェルナー・ペンツェル、下村美佐と共に立ち上げる
2010年雑誌コヨーテ誌上で　caravan lost を再び連載
2010年beyond beyond写真展をMISAKO&ROSENにて開催
2010年テシゴトノオト展（淡路島アートフェスティバル2010／アサヒアートフェスティバル2010）をノマド村で開催。

ノマド村　http://www.nomadomura.net



ノマド村のある旧生穂第二小学校

神戸の街を抜け明石海峡大橋を渡ると、視界はどんどん緑色に染まっていった。淡路島のゆっくりと流れる時間と田園風景の中で彼女は何を考えるのだろう。インタビューへの不安と期待で胸がいっぱいのわたしたちを、優しく迎え入れてくれた。

淡路島に来るまでは、スイスのジュネーブでアートプロジェクトをおこなっていた茂木さん。その名前であるジュパジュカンパニーのジュパジュとは英語で Day By Day のこと。日々を大事に充実して過ごすことが大切だという茂木さん夫妻の生活観である。まず、異国での活動の経緯、なぜ拠点を日本に移すことにしたのかをうかがった。

―淡路島でノマド村を始める前、どのような活動をされていたんですか。

アーティスト・イン・レジデンス[*1]的な活動をしてました。世界中からアーティストを呼んでき て、滞在しながら芸術作品を制作してもらうという活動です。それを3年間やりました。しかし、私たちの活動を支援していた財団の支援を得ることが難しくなり、この先続けるのは厳しいな、と。じゃあ、別の場所で！ ということで日本に拠点を移すことにしました。日本では、支援をあてにするばかりでなく自立した活動をしようと考えてます。

ノマド村は、もともと生穂第二小学校という山間の小さな小学校。少子化の影響で廃校になったのが2009年。ここが、地域の人々を結ぶなにかに生まれ変われば という地域の人々の思いと、日本の田舎に活動拠点を移したいという茂木さんの思いを結びつけたのがNPO法人淡路島アートセンターだ。コーディネイト役のやまぐちさんが行政機関や地域住民と掛け合って話を進め、生穂第二小学校はノマド村として再生したのだ。

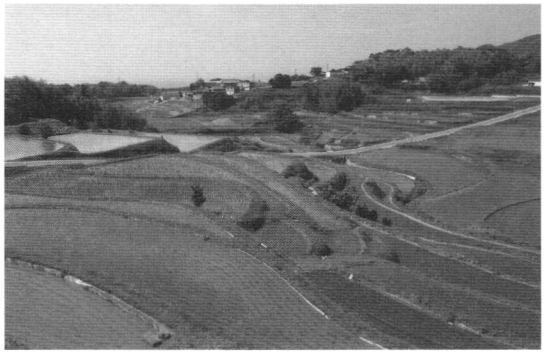
土日のみ営業しているカフェノマド

東京とか神奈川とか、関東の都会は"田舎"にたどり着くまでがとても遠いんですよね。ちょっとした田舎はあるんだけど、東京の影響があるから避けたかった。だからといって北のほうに行くと冬は大変。その点、関西って田舎が近いでしょ。ここからでも大阪や神戸には一時間ほどで行ける。関西がいいかなと思ったのはそういうところからです。

—私たちは生まれてからずっと関西にいるから、そんなこと考えもしませんでした。関西の中でも、淡路島にしようと思ったのはなぜでしょうか。

四方を海で囲まれているという『島』という地理的な魅力と気候のよさ。そして、地域の人たちに人間味があるということ。よそからやって来て、その地域に馴染むためには、人間関係が大事ですよね。

学生時代からずっと写真を中心に制作していた茂木さん。夫のヴェルナーさんの影響で現在は映画の製作もしている。



ノマド村の周りに広がる日本の原風景

写真と映像では、作品作りに対する自分の姿勢がちょっと違うんです。私は写真を通じて個人的な興味を他人に見せるということをしています。自分のやっていることを社会に見せるということ。ただ、アーティストになった以上は、自分で気づいていないことも、はっきり分かってから作品として他人に見てもらわないと、と思ってはいます。つまり、無意識に撮っているんですけどそれで終わりじゃなくて、なんでそれを撮ったんだろう、撮った写真の中からなぜこの写真を選んだんだろうって。カメラは被写体と自分の関係性を写す、ひとつの道具のようなものなんです。

—今はみんなデジカメを持っていて、写メもあって、みんな写真を撮りますが、撮れたらそれで満足！終わり！です。

写真を撮ることって感覚的なんですよ。思っていることが写る、そこがおもしろい。自分以外の何かを撮っているのに、自分の心が写る。

—アーティストの茂木さんとしては私たち鑑賞者に対して、作品をどう観てほしいとか、何を伝えたいとか、ありますか？

写真を見て何を感じるか、

それは見る人におまかせします。コントロールする気持ちはないし。私が見たものに共感してくれたらそれはそれでうれしい。けど、すべての人に分かってほしいとは思ってないです。

自分で自分を見ることはできない。しかし、カメラのレンズを通せば、見ることができる。だから茂木さんは写真を撮っているのだ。

—では映像は写真とどう違うんでしょう。

映像は自分の外に興味がある。もちろんどうしてそれに興味をもつのかというところは、写真と同じように知りたいんだけど、写真は自分自身の物語で、映像は誰かの物語。映像を通じて、その物語を観る人自身にシンクロさせていくというか。世の中の人は絶対興味をもつだろうな、という確信があって、それをもっと共有したい感じ。大切にしたい気持ちを伝えるという、写真とは違って積極的な感じ（笑）。

—作品には女性の写真が多いような気がするのですが。

う～ん、なんでだろう。なんでしょうね？（笑）自分を投影しているっていうのがあるんじゃないですかね？もちろん別の誰かなんだけど、同じ年代で、同じ時代の空気を吸っているっていうか。男の子が自分の彼女を撮ったり、女の子を撮ったりというのとはまた違うと思うんですよ。昔は写真の世界って男性の世界で、私がやり始めたころは、女の子が写真を撮ることは少なくて、その時はすごく珍しかったのかもしれない。

女性の写真家が現れ始めると、メディアは食いついた。女性の写真家というカテゴリーをつくり、ひとくくりにした。

メディアってすぐひとくくりにしちゃうから、それはすごく嫌だなって思った。でもそうやって、写真で売れていく女の子たち（女性の写真家）も多かった。私はそうやって消費されるのが嫌だったんです。メディアに食われちゃうと、自分のイメージが独り歩きしちゃうから。私、へそが曲がってるんで（笑）。世間が注目することから遠ざかりたくなるっていうか。

いつもは静かなノマド村だが、土日は校長室と職員室をひとつなぎにしたカフェに来るお客さんでにぎわっている。厨房で料理を作るのは茂木さん。

―いろんな雑誌にノマド村が取り上げられたせいか、カフェに訪れるお客さんがとても多いですね。

取り上げられるのはなぜかというと、もともと私がもっているネットワークですね。東京で仕事をしていた時、雑誌の連載を持っていたのでその縁で情報発信できました。地域の人々に知られるようになったのは、淡路島アートセンターの存在が大きい。そのネットワークでノマド村が知られるようになっていきました。「淡路島の人は珍しもの好きだから、最初は食いついてくる。けど、そのうち飽きて行かなくなる。だからあまり期待しないほうがいいよ」って言われていたので、1日20人くらい来てくれたらいいかなぁってぐらいに思っていたんですけどね。今はお客さんが橋を渡っていっぱい来てくれて、土日しか営業してないんですが、一日に30～40人くらいかな？　とぎれることもないので、自分でもびっくりしてます。看板も出してないのにね。

―どうしてここでカフェをやろうと思ったんですか？

スイスにいた時は、アーティストだけが集まって活動をして、地元の人には開かれてなかったんです。だからここでは、地元の人たちになにか還元できるようなことをしたかった。アートという枠組みだけだと、一般の人は入りにくいですよね。淡路島は特に田舎だし、へんにみられるっていうか（笑）。「怪しいものではないですよ」ということを伝えるためにも、カフェだったらアートに興味がない人でも、気軽に来られるんじゃないかと思って。

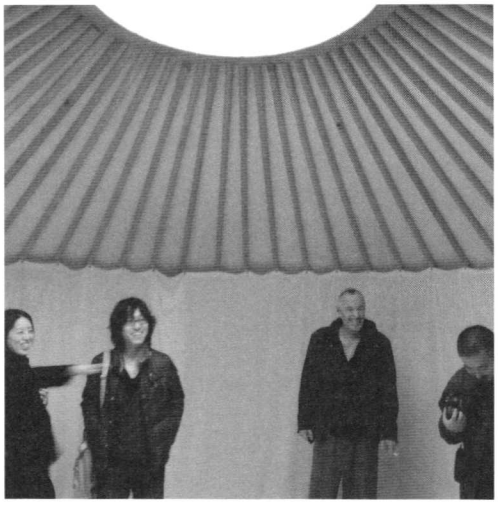
少子化の影響で廃校になる学校が増えている。学校はその地域のコミュニティーの場としても機能していることが多いから、廃校になるということは地域の活力を削ぐことにつながる。そこで廃校を、他の目的で復活させるという動きが全国的にある。山村の小さな小学校だった建物をカフェにしてしまうという発想や、そういう生き方に注目が集まっている。

東北で震災が起こって数カ月は、避難場所として小学校を開放した茂木さん夫妻。これからの展望について聞いた。

自分たちができることはアートなので、それで社会になにか伝える空間ができたらな、と。まだカフェしか作れてないですが、徐々に教室もギャラリーとして使えたら、と思ってます。7月に、地域の竹を使ってカフェに竹のテラスをつくるワークショップをやる予定です。淡路島の夏は暑いので日よけになるようにして。10月から、外にあるパオの中でアート展をやろうと考えてます。ヴェルナーと2人で企画していて、サウンドインスタレーション[*2]になるので、音楽家やサウンドテクニシャンや技術者とコラボレーションしながら作品化して、見に来た一般の人が体験できるような企画にしようと思ってます。

—どんな内容になるんですか?

音で表現するもので、パオの中に入ると見るものは何もないんですよ。で、床に、靴を写真に撮ってプリントしたものを作って、それを踏むとセンサーが反応して音が鳴るんです。コンピューターにプログラムが仕込んであって、30個ぐらいの音色があるんですけど。ステップが楽器のようなものなので、たくさんの人でも、個人でも楽しめる空間になりますね。たまたまそこに居合わせた人たちが、それぞれ出



運動場奥にあるパオ

す音を共有して、その時その空間でそこにいる人が作り出す作品。

—現代アートですね。

ほかにも、映像作品を今、作っている最中です。淡路島の人々の日常の暮らしを撮って、1時間ちょっとぐらいの長さで作ってます。ドキュメンタリーとか、この人が輝いています！　とかではなくて、私的なビジュアルで作っています。その映像に音楽を即興で合わせて演奏するというのも考えています。アメリカから演奏家を呼んで演奏してもらおうと思っています。サウンドインスタレーションそれ自体はやっている人はいると思います。けど、参加型というのは珍しいかもしれない。映画に即興で音楽をつけるというのも珍しいと思いますね。映像に関してはまだ始めたばかりですけど、今は漁師さんを撮っていて、朝の4時に船に乗ったりしてますよ（笑）。

—すごい！アクティブですね。

チャレンジ精神って大切だと思うんです。日本人は保証がないと動かない人って多いから、そういう部分が欠けてるのかもしれないですね。

—なるほど。何かをしたいという気持ちが大事なんですね。では最後に、茂木さんにとって芸術とはなんでしょう？

みんなあまりに日常に溶け込んでしまっていて、見えているのに見えていないものがいっぱいあるというか、だからそういう人たちの目を開かせるのが芸術の役割だと思います。ただ生活している人ってけっこういるじゃないですか。そういう人は「見えているのに見えていない」ことがいっぱいある。だから、それを指さしてあげる。「本当はこうじゃないんですか？」と伝えてあげることが、私にとっての芸術の意味だと思いますけどね。

芸術に対して決してブレない茂木さんに、信念の強さ、行動力、新しいスタイルのアートを生み出す発想力を感じとった。自分の作品について語るときも、カフェについて語るときも、自分にできることをできる範囲でやっていると、おっしゃっていた。

芸術家と話したことがなく、自分には創作活動など無縁のものだと思っていたが、自分にできることをできる範囲で実行すれば、私に限らず誰でも芸術家になれるんだと思った。大切なことはブレない信念とチャレンジすること。それだけである。

カフェの前ではノマド村のある長澤の野菜が販売されている

*1 アーティスト・イン・レジデンス
美術家に一定期間、特定の場所に滞在し、そこで創作活動に専念することのできる環境を提供するプログラムの総称。地方自治体、非営利団体（NPO）、美術館、民間企業など運営主体はさまざまで、国際交流や文化振興、若手アーティストの発掘など、実施目的やアーティストの選考基準も多様である。

*2 サウンドインスタレーション
絵画・彫刻・映像・写真などと並ぶ現代美術における表現手法・ジャンルの一つであり、音響などを用いて空間を構成する場所や空間全体を作品として体験させる芸術。

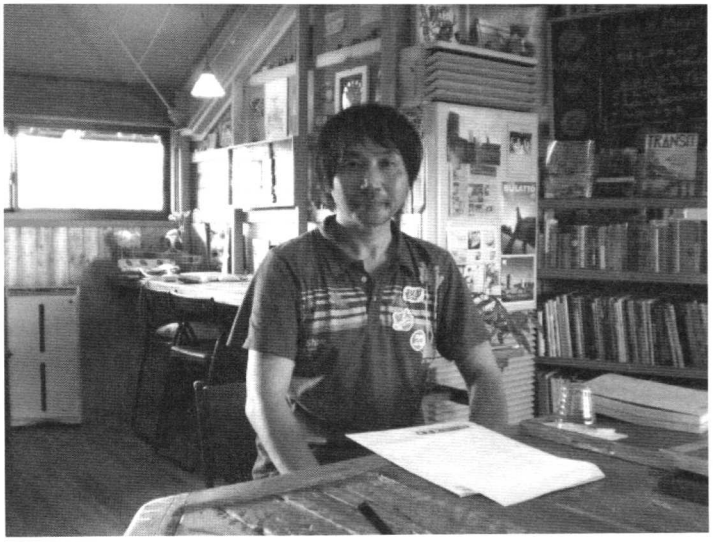
2 階にある元教室が工房

竹・未来建築ワークショップ（2011.7 月）

気持ちひとつで、
誰でもアーティストになれる

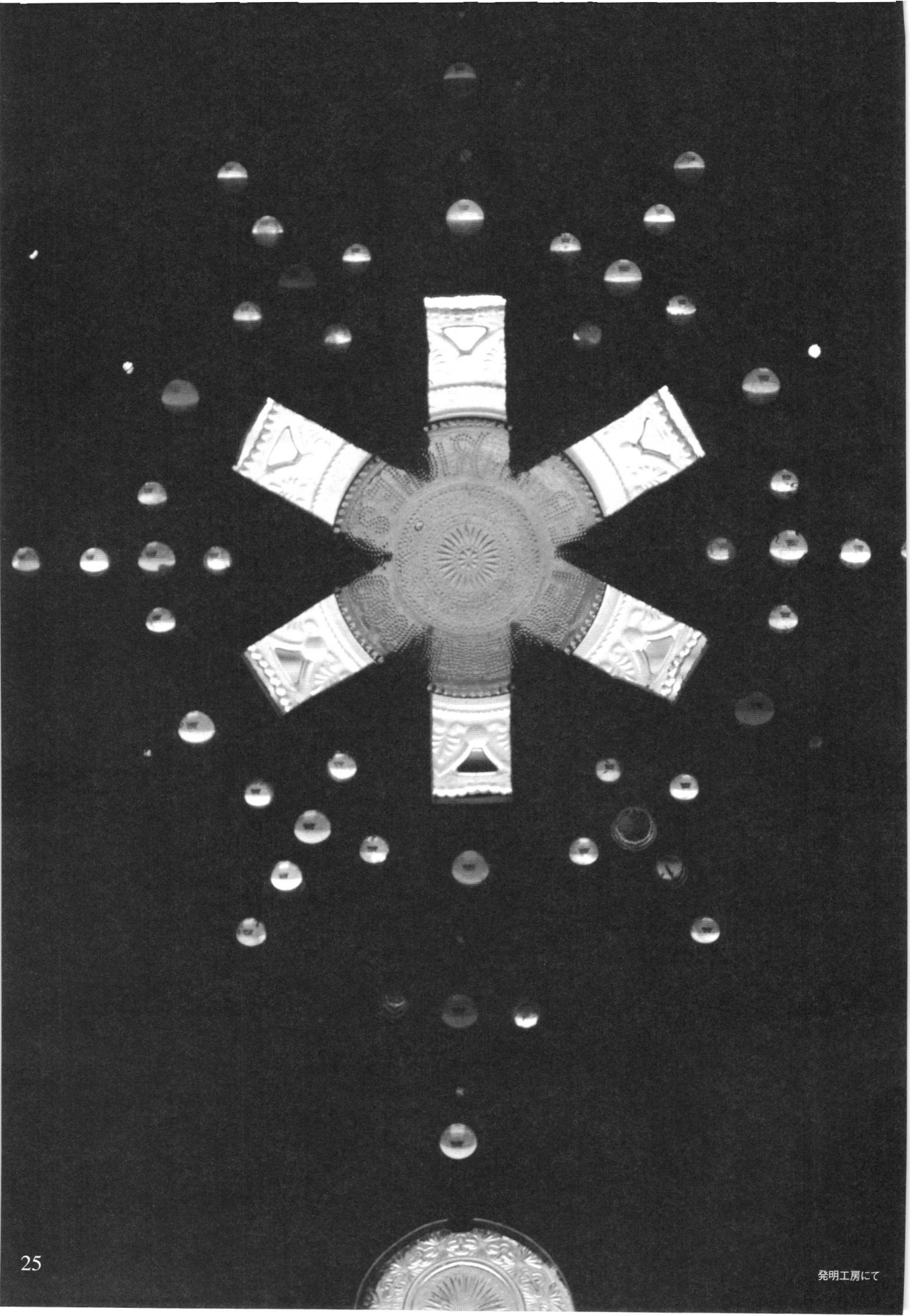
発明工房 尾崎泰弘さん

インタビュアー 小巻美空・松田浩典



尾崎泰弘
現代美術作家、発明工房主宰。
1959年兵庫県淡路島生まれ、在住。
82年より各地で作品を企画・構想・制作。
93年に[THE ARK PROJECT]企画・制作を開始。

ナフシャ　http://nafsha.geo.jp/



発明工房にて

6月下旬の昼下がり、尾崎さんのアトリエ「発明工房」を訪れた。バイパスができてしまったからか交通量が乏しく閑散とした生穂のメインストリート。よほど気をつけていないと通り過ぎてしまう看板を目印に左折する。車一台がやっと通れる狭い道を行くと、恐竜のオブジェが見えてきた。後ろの黒っぽい木造の倉庫が尾崎さんの創作の場である発明工房。その2階、窓から海が見える隠れ家のようなカフェ、「ナフシャ」でお話を聞いた。

レオナルドとヒッピー

物心ついた頃から、芸術家にはなるような気がずっとしていました。幼い頃から、大きな石の上に乗って、何か作品を作っている自分の姿が、フラッシュのようによく頭に浮かんでいたんです。小学生の頃には、もう完全に決めていました。

NHKの「日曜美術館」というアートを紹介する番組もよく見ていました。中学生の頃は、本屋に行くとルネサンスに関する本を手に取ることが多かったです。レオナルド・ダ・ヴィンチに憧れてましたね。彼は絵画だけに限らず、彫刻や建築など、オールマイティーに活躍していたじゃないですか。いろんなアートを幅広くやっていこうと思ったのは、考えてみればレオナルドのそんなところに影響を受けたのかもしれません。

発明工房ができた頃と、映画「ダ・ヴィンチ・コード」が公開されたのが同じ時期で。工房の名前を考える際に、いろいろ考えて、「ダ・ヴィンチ・コード」から「ダ・ヴィンチ・工房」などと面白く考えていましたが、結局「発明工房」になりました（笑）。

また、中学校の図書館で美術手帖の「アンフォルメル以降」の特集を見つけて、美術の幅の広さに衝撃を受けました。ハイレッドセンター[*1]の活動などが載っていました。

中学3年生の頃に、「地球の上に生きる」「太陽とともに生きる」[*2]という本に出会って、強い衝撃を受けたことも宇宙について考えるようになったきっかけでした。自然の中で生きようとするヒッピーカルチャーを描いた本なのですが、実に面白い。小屋の建て方、家具の作り方、農作業、料理など、大地のリズムに従ってシンプルに生きる方法が綴られている。この世界観に圧倒されて、僕もこんな生き方がしたいと思いました。思春期に出会った本や音楽は、その人の価値観の基本を形作ると思っています。そういう意味で、この本と出会ったから、今の僕があるというくらい影響されましたね。毎朝、太陽が出る前に起き出し、一日の動きを太陽の光を感じながら考えたりします。神聖な時間です…。

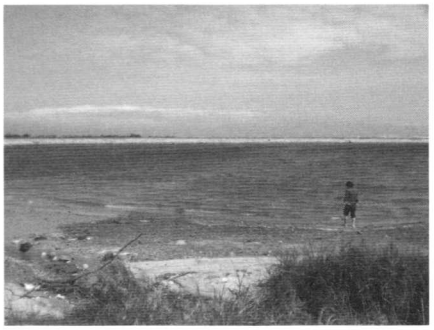
今、私たちは福島の原発の問題や食の安全とか、環境に関わるいろんな問題を抱えながら生きています。だからこそ僕は自然を大切にしながら生きていきたいんです。純粋に、空の青さや美しさを感じられるような環境を作りたくて。そういうことを日頃考えていて、宇宙から見たら僕たちが過ごしている場所はどんな風景なんだろうと、考えて思いついたのが「宇宙と対話する装置」という作品です。広い開口部が空に向いていて、真ん中に立って喋ると音が反響します。現在、あの作品は宇宙から一転、地球と対話する装

置になっています。というのも、宇宙と対話する装置のままだと、上が重くて不安定で転げそうだったので逆さに置きました。それに、ナフシャを始めた頃はトイレがなかったんですよ。だから、この中にトイレを設置したらいいんじゃないかと。まぁ、地球と対話する時代だからということで（笑）。同じような発想で作ったものには、50mの背丈の巨人が履くことのできる「巨人の木靴」や、高さが異常に高い椅子を自然の中に設置し、そこに座ることによって宇宙を感じ取ることのできる「古代天文台」などがあります。

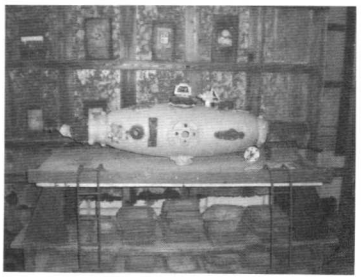
宇宙の流れを感じながら生きる

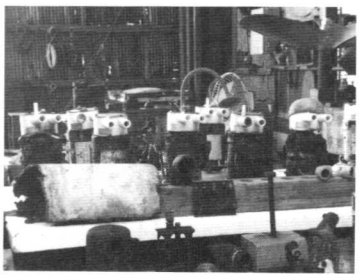
太陽とともに生活したり、木など、自然の中にある素材と対話しながら作品を作っているうちに、次に作りたいものがどんどん頭に浮かんでくる――そういうやり方が僕のスタイルです。この夏、明石海峡公園で「世界のクワガタ・カブトムシ展」をやっていて、そこで木製の巨大昆虫オブジェを4体展示しました。インスピレーションの根源である自然を大事にしたいので、制作している間も身の回りにある自然を意識するようにしていました。

太陽の動きや宇宙の流れを感じながら、広がりのあるものを作りたいです。宇宙から見れば小さなものかもしれませんけどね。自分の周りのものを取り込んだ自然を感じられる作品が、自分には合っていると思います。


ナフシャ（カフェ）の窓から海が見える

自分の作品に興味を持って見てくれていたり、子供たちがよじ登って遊んでいるところを見ると、やっぱり嬉しいですね。作品を介して人との繋がりを感じています。今回の東日本大地震など、社会的に大きな問題が起こった時、そこに自分がどう関わっていくのか、それを考えることも大事だと考えています。今回の震災でも「どうしても何かの形で支援したい！」という気持ちがあって。こないだ茨木市の la galerie での「東日本大震災復興支援緊急企画」の展覧会に、6人乗りUFOの作品を持って行って、作品の中にちゃぶ台を置いて、お茶ができるようにしました。それで1組300円のお茶代を貰って、それを全額義援金にしました。





旧仁井小学校で行われた「縄文まつり」。運動場に設けられた特設ステージは尾崎さんと「かやぶき屋根保存会」との合作。(2011.9.30〜10.2)

賀茂神社境内に展示されたUFO　国生み神話芸術祭2010
(2010.9.18・19)

Che Oke'tenのライブ(2011.12.22)

ライブからカフェが生まれた

ここ（発明工房の2階）でライブをするようになったのは、インド舞踊をしている知り合いのユミさんに、「ここでライブをしたい！」と言われたのがきっかけです。以前は作品の倉庫として使っていたので、まず片づけて空間を作って、竹を組んだりしてステージを作りました。ライブをしはじめるとそれがいろんな人に伝わって、「ライブをさせてほしい」と、いろんなミュージシャンから頼まれるようになりました。そういう感じでだんだんとライブするところとして知られるようになったんです。

ここではいろんな方がライブをします。アフリカのジャンベやカリンバ、アボリジニーのディジュリドゥ、トルコの太鼓など、いろんな国の楽器を使って演奏する人もいます。ここに置いてあるCDや、店内でかけているのは、ゆかりのあるアーティストのものばかりです。彼らは、自分のスタンスをしっかり持っているので、日本各地を回るツアーもすべて自分たちで組んでいて。その土地の風景を感じながら、旅でインスピレーションを得て音楽活動をしています。そういうところから生まれた音楽はオリジナリティーがあって、この空間によく響くんです。

ここで演奏しているアーティストの方は、マイペースにやっている人が多いですが、将来の問題で悩む方が多いみたいで…。ナフシャに集まる人は、悩んだらインドに惹かれ旅心を抱く人が多いんです。行ってみると、考え方がガラッと変わるみたいで。目先のことに囚われない、大きなエネルギーを感じているのでしょう。

アーティストやお客さんから、「ライブ後にお茶を飲む場所がほしい」という声が出てきて、自然と出来上がってきたのがカフェ（ナフシャ）です。昔、神戸の新開地に、アーティストがよく集まるカフェがあったんです。そこに僕のオブジェを展示していたんですが、閉店するのでオブジェを取りに来てほしいという連絡がきて。受け取りに行ったところ、ナフシャ（古代ユダの言葉で「宇宙の根源と私たちを結ぶもの」）の名前を使ってもいいということで。

カフェには常連さんだけではなく、旅行雑誌を見て淡路島に遊びに来た人や、四国へ行く途中に寄ってくれる人、知り合いの芸術家など、いろんな人が訪れます。カフェにいながら、旅人やアーティストに会えるので楽しいです。

最近では、この辺も過疎化や少子化が目立ち始めました。小学校もクラスが少なく、廃校になったり、合併したり…。廃校になった小学校を改装して行うイベントも増えてきました。今年の秋も、旧仁井小学校で「縄文まつり」（9／30、10／1・2）というライブイベントがあります。ナフシャでライブをやっている人たちが集まります。僕もかやぶき屋根保存会の人たちと舞台を作ります。たとえ少子化で廃校になったとしても、なんらかの形でその場所を活かす試みです。淡路島を好きな人たちが集まるイベントで、「淡路島が好き」っていう共通の想いがあって、それで繋がっているような気がするんです。

夢を見続けることが自然治癒力を高める

クールジャパンといって、外国からアキバ文化も日本独自のものと見られるようになりました。アートにきっちりとした定義はありませんが、日常の暮らしの中にある素材をちょっとひねって昇華させる、それが最近のアートですね。

ヤノベケンジ、中原浩大、村上隆といったアーティストが活躍しています。彼らを見ていると、

必ず人目を引く個性がありますね。つまり、「人がやっていることを、自分はやりたくない」とか、アートの力を信じ「自分にしかできないことをやりたい」という強い意志がある。そうであるからこそ、人に何かを伝えたり、感動を与えることができると思う。また芸術家は、「自分はこのために生まれてきたんだ」というモチベーションをどれだけ持ち続けることができるかということも重要です。

時々、「どうしたらアーティストになれるんだろう」と考える人がいますが、それは考えても仕方のないことです。「アーティストになりたい」ではなくて、「自分がアーティストだ」と思えば、その人はもうアーティストなんです。誰かに決められることではなく、本人の意識の持ち方の問題です。時には、アーティストである自分を演じることに疲れることもあるし、自分を追い込む時だってあります。でも、そこで逃げたら、それはもうアーティストではありません。アーティストである自分と、真正面から向き合い続けていかないと。もちろんそれだけでなく、純粋な気持ちで楽しむことも重要ですけどね。

アーティストではありませんが、知り合いに自然治癒力の先生で、とてもユニークな方がいます。50代、60代の頃は、今がいちばんおもしろいと思っていたそうですが、70代になるとますますおもしろくなってきたと言っていて、本当に人生を楽しんでいるんです。最期は、治療中に好みの看護師さんに倒れかかって終わりたいと言っていましたし(笑)。いつも前向きに夢を見続けることが、自然治癒力を高めることに繋がり、無邪気な気持ちで何かに夢中になることによって、邪気を寄せ付けないのだと思います。僕の作品のコンセプトも「子供の頃の夢に真剣に取り組む」ことなので、真剣に、楽しく、夢中になって生きていきたいです。これからも心の友、淡路島で、いい作品を作り続けていきたいと思います。

発明工房の前の空き地にある、宇宙と対話する装置。

*1 ハイレッドセンター
高松次郎、赤瀬川原平、中西夏之の3名により1960年代前半に 結成された前衛芸術グループ。

*2『太陽とともに生きる』(アリシア・ベイ＝ローレル著、草思社出版、1975)
「地球とともに生きる」の姉妹篇。全頁イラスト入りの書き文字の本。

発明工房の敷地内にある造形作品。

生活と芸術はそもそもひとつ

淡路島美術大学 岡本純一さん

インタビュアー 河野祥平・谷口和弘

岡本純一

1979年 兵庫県淡路島生まれ
2002年 「清水多嘉示賞」受賞（大学院生への奨学金助成）
2004年 武蔵野美術大学 大学院 彫刻コース 修了
2005年 「資 生 堂 ADSP」 選 出 (Art Documents Support Program by SHISEIDO)
2009年 「第4回資生堂アートエッグ」入選
2010年 「淡路島美術大学」を立ち上げる。

<主な個展>

2010 「市中の山虚」資生堂ギャラリー・東京
2007 「せかい地図」Gallary HIRAWATA・神奈川
2003 「六畳の水槽」ギャラリー覚（共催 GALLERY 二葉）・東京
2003 「六畳の水槽」GALLERY 二葉（共催ギャラリー覚）・東京
2002 「個展」ギャラリー山口・東京
2002 「個展」マキイマサル・ファインアーツ・東京

<主なグループ展>

2010 あわびアートプロジェクト「看護+アート+医療 vol.1」淡路島美術大学・兵庫
2009 「六甲ミーツアート - 芸術散歩 2010」六甲山周辺・兵庫
2009 「For Rent! For Talent!5」三菱地所アルティアム・福岡
2009 「中之条ビエンナーレ」群馬県中之条
2008 「リニューアル」武蔵野美術大学美術資料図書館・東京
2008 「飛騨高山現代美術展 2008」飛騨高山の里山・岐阜
2008 「岡本純一 × 遠藤竜太」巷房階段下・東京
「RA'08 武蔵野美術大学助手研究発表」武蔵野美術大学（2007,2006,2005 出品）・東京
2005 「Shows」アルスギャラリー・東京（資生堂 ADSP 選出）
2005 「第1回 出雲・玉造アートフェスティバル」島根玉造温泉
2004 「千葉アートフラッシュ 04」千葉市民ギャラリー・いなげ
2004 「崇高なる現在 世界の版表現と教育の現場より」武蔵野美術大学・東京

<ワークショップなど>

2010 「わにの口から肛門へ」（「わに祭」作品奉納イベント）琴平町公会堂・香川
2010 「ビニール袋で地球をつくる!」高松市塩江美術館・香川
2010 「通世泰画廊ワークショップ」トステムギャラリー・大連（中国）
2009 「地球をつくる」府中市美術館でのワークショップ・東京
2009 「中之条にピラミッド」中之条ビエンナーレでのワークショップ・群馬
他多数

淡路島美術大学 http://awajibidai.net

6月下旬、梅雨の合間の快晴な1日。淡路島は青い。旧津名高校校舎をキャンパスとする関西看護医療大学。その中に淡路島美術大学がある。訪れた時、岡本さん夫妻と、まわりを走り回るお子さんがいた。2階から上の教室に展示されている現代アート作品を鑑賞させていただき、取材を始めた。

「あわび」とはなにか？

―「淡路島美術大学（あわび）」ってインパクトありますね。

略して「あわび」が気に入ってます。ロゴマークのあわびくんも可愛いから見てね。

―現代アートが展示されいて1階では陶芸体験ができる「淡路島美術大学」ですが、カテゴライズすると？

んー。その都度変化していくものかな。むしろカテゴライズしにくいものにしたいです。

―どういうきっかけで「あわび」が出来たのですか？

淡路島に戻ってくるときに、淡路島アートセンターのやまぐちさんに紹介してもらいました。関西看護医療大学の学長が芸術活動に理解がある方で、空いている教室をそのままお借りすることになってできたのが「あわび」です。この場所の特異性を活かしてどういうことができるか考え、これからいろいろ展開していこうと思っています。

―岡本さんは「あわび」の学長ということですが、芸術家岡本純一としてはどんな活動をされていますか？

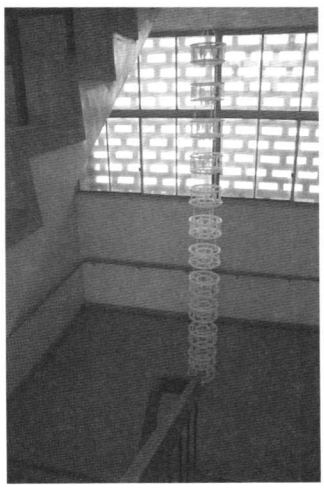
彫刻と陶芸作品をつくっています。といっても削ったり、掘ったりするいわゆる彫刻とは少し違って、「空間を彫刻する」ということをやっています。現在は、民家を彫刻（改装）したり、廃材を利用した陶芸作品（器）を作っています。あわびも作品なのかもしれません。あわびでは淡路島の子どもたちや地域の人たちと関わりながら作品を体験するワークショップなども行っています。

―そのワークショップで作った作品が二階にある気球ですよね、ビニール袋をつなぎ合わせて作った。

そうそう、直径約4メートル、の球体のものです。いろんな場所でビニール気球を作ってきたので、全部つなげると全長50メートル以上になります。

―この作品の意図について教えてください。

平面的な情報に覆われた日常に、手で触ったり、中に入ることができる立体物を作りたいと考えました。お金をかけずに手に入るものでね。でっかいおもちゃを作ったって感じかな。ただ、廃材やビニール袋を使うことで消費社会や環境問題についても意識するかもしれない。直接的



あわびとこども美術館プレイベント
「ハーブ&ドロシー上映会」ギャラリートーク(2011.11.23)

には楽しく遊ぶわけだけど、結果的に社会を取り巻くさまざまな問題につながっていけばいいなと思います。

―「あわび」の校舎の廊下などに意味深なメッセージが書かれてます。

あわびを訪れた大人たちにとって、校舎内に展示されたアート作品は、とても寡黙に感じられるかもしれません。なので、作品鑑賞の手掛かりになるようにメッセージを挿入しています。「分からん」という人たちの頭をつつく刺激剤になればと思ってます。

もともとは野球少年

―どのような幼少期でしたか?

よくおぼえてないけど、野球と勉強を、なんとなくしていた。父親が少年野球のコーチをしていて、その流れで野球を始めてしまい(笑)。最初のころは楽しかったけど、思春期になるにつれ、だんだんしんどくなってきた。野球部は上下関係が厳しかったし。

―その当時から芸術は?

ものを作るのは好きでした。映画を観る事も。「のっぽさん」が好きでしたね。

―いつから芸術活動を始めましたか?

淡路島に帰ってきてからようやく始められた、という言い方ができるかも…でも芸術を「始めよう!」と思って始めたことはないような気がします。

―美大進学のきっかけは?

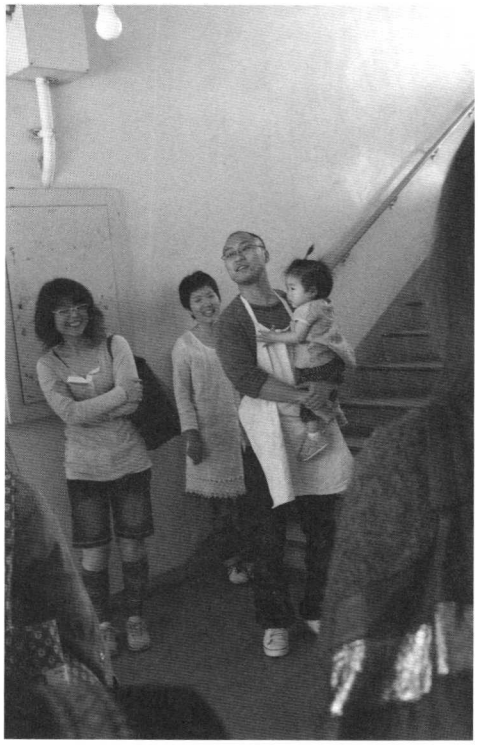
高校のときの美術の先生かな。今でもお付き合いさせていただいてますけど、元気で活発でよくしゃべる先生で。先生の息子さんが高校に教育実習できたんです。彼が彫刻作品を作っていて、その影響が強いですね。

―芸術で食べていくのはたいへんとよく言いますが、そういうことは考えました?

経済的なことは高校生だからそんなに深くは考えてなかった。けど、美術の先生という生き方もあるかなーとなんとなく。

―大学卒業後はどのような活動をされていたのですか?

東京で12年間、美術大学に関わってきました。大学院終了後、教員と学生のパイプになるような役割の大学助手の仕事を5年間勤めました。今から考えると時間と金銭面で恵まれていた時かなぁ。大学にアトリエが



あり、給料ももらえたし、休みもたくさんあった。特に毎年、奈良京都に行く古美術研究旅行は、すばらしい経験になりました。

東京で子育てするのがもったいない

—なぜ淡路島に戻ろうと思ったのですか?

東京で子育てするのがもったいないような気がして。それに両親ともがんで亡くしているので、子供たちの食べ物や農作物、健康などに関心が向いていたこともあります。都会の人工的な暮らしより、地に足をつけた暮らしがしたいと感じていました。大量消費をこのまま続けて、経済成長していくのはもう限界だとも感じていたし。永遠に成長していくことはあり得ませんからね。そういった様々な考えが交差して、田舎的な暮らし、地に足をつけた暮らしがしたかった。

—東京の生活から淡路島に戻るということは奥さんも賛成だったのですか?

むしろ、奥さんの方が乗り気でした。彼女が言い始めた感じかな。

—実際に淡路島に帰って来られて、都会と田舎は何が違うと思われますか?

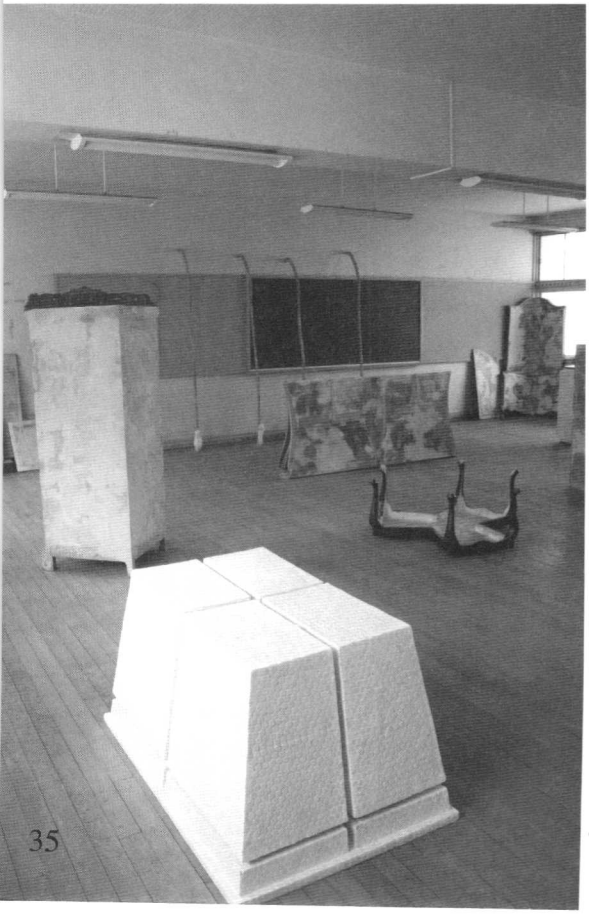
都会には都会の良さがあり、田舎には田舎の良さがある。でも僕は田舎の方がやりやすい。広い空間があるし伸びやかに活動できる。都会にいると都市の流れに飲み込まれるし、周りに影響を受けて同調してしまう。淡路島に来て自分の家族や活動について考える時間は確実に増えました。

—ということは淡路島の方が芸術活動しやすいということですか?

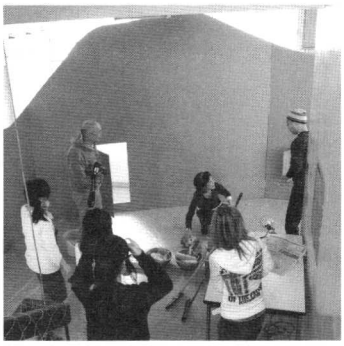
どっちが良いかは、まだ分からないけど、作品のスタイルは大きく変わります。都会には白い箱のような展示スペースを持った美術館やギャラリーがあるし、アートに興味がある人たちも多くいる。でも淡路島はそこが弱い。だから、カフェだったり、「あわび」だったり、ギャラリーとか、それに近いものを自分たちで作ったり、またそれ以上の新しい何かを生み出そうという気持ちになる。表現を公開するシステムから作っていかなければならないところがエキサイティングだし、とてもおもしろい。

ゲストハウスは「サイクルとつながり」がテーマ

今、ゲストハウスを作っています。みんなが宿泊できるアート作品として。民家が建てられた当時（約80年前）を想像できるようなやり方で民家をリノベーションしてる最中です。そこで使う器も作ってます。改修の際、



あわびに展示されている現代アート



廃材や土塀の土や瓦礫など不要物がいっぱいでてくるけど、その廃材を廃棄するのではなく、違った形でゲストハウスに循環させたいと考えました。つまり、廃材が日用品に形を変えて、生活に戻ってくるということ。廃材を燃やして灰にすることで陶芸の釉薬として使えます。その釉薬を土壁で作った陶芸作品にかけて焼成すると、うまい具合に鉄分や木灰が反応して美しい土色をした器が出来上がります。他にはゲストハウス体験者の排便を堆肥にして有機野菜を作ります。その野菜を次に来た人が食べると、時間を経て過去の人たちと関係付けられる。そもそも、土壌は、生き物の排泄物や死骸の堆積物だし、石油も思い起こせば有機物が原料。すべては過去からつながっているんです。すべてはつながっているんだけど、近代化が行き過ぎることで、僕たちはそのつながりを絶とうとしている。僕らの存在も堆積物の一つで、いずれは大きな循環の流れの中に取り込まれます。その流れを実感することが、地に足をつけた生活になる気がします。

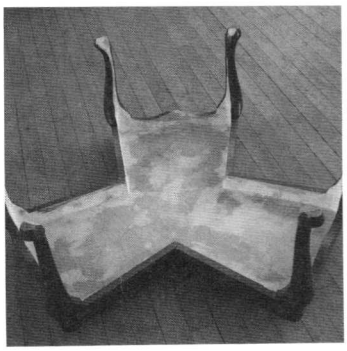
—どのようなお客さんを招きたいですか？　奥さんの反対はなかったですか？

世代問わずいろんな人が来てほしいです。反対はありません。むしろ奥さんの考え方でもあるし。来年…来春ぐらいには、はじめられたらいいかなぁ…。来てね（笑）。

—（ゲストハウスは）生活空間と芸術空間が一体となっていますね。

今までの芸術空間、つまりギャラリーにポンと作品が置いてあるような展示方法は、最近の自分の生活とかけ離れているなあと感じていました。リアリティが感じられない。そもそも芸術と生活を分けること自体に無理があるような気がして。

—“サイクル”というテーマはどこ



遠藤幹子氏による黒板ワークショップ 淡路島美術大学（2011.11.23）

から来たのですか？

近代化する以前は循環社会で、なにもかも再利用されてた。昔の人たちはそれが当たり前だったけれど、現代の日本に生きる私たちにとっては当たり前じゃなくなってる。小学校の修学旅行で京都と奈良に行って、お寺の境内の静けさとかが、妙に自分にフィットしたのを覚えています。特に南禅寺の記憶が心地よく残っていて。それをたよりに学生の時、南禅寺を訪ねました。その時、近代化以前の人々の生活や自然観に強く惹かれる自分に気付きました。その共感が、サイクルというテーマにつながっているように思います。

「あわび」のこれから

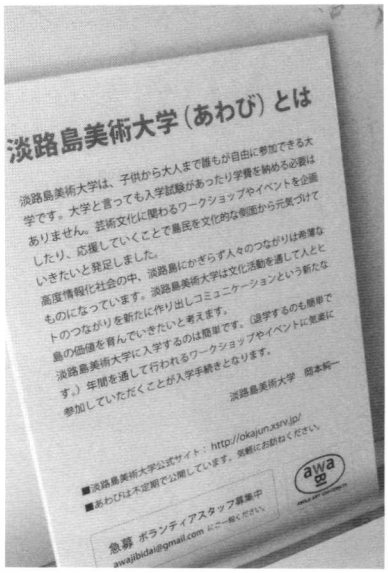
―これからの「あわび」はどうなっていきそうですか？

近い将来としては、「あわびとこども美術館」という展覧会を開催します。そこで無農薬野菜の直売をしたいと思ってます。「食べ物」は、子どもたちの将来、未来を考える上でとても大切なものです。でも安全が当たり前だった食品が、現代では疑わなくてはならない時代になってしまいました。食べ物が信頼できなければ、地に足のついた暮らしは出来ません。だから僕たちは農をテーマにした展覧会を企画しています。

あとは、あわびをもっとおっきくしたいですね。そして大人も含めて、みんながわくわく、ぞわぞわするような空間にしたいです。

―最後に、岡本さんにとって芸術とはなんですか？

「日々の生活がハッピーになること」かな。また、当たり前の日常に支配されず、より人間らしい生活を求める事です。



淡路島芸術大学（あわび）
http://awajibidai.net/

元津名高校をキャンパスとしている関西看護医療大学で、10教室ほど改修されずに残っている建物がある。そこを岡本純一さんが借りて、2010年4月から始めたバーチャルな大学が淡路島美術大学。村元崇洋、タノタイガ、窪田美樹などの作品が随時展示されている。

岡本純一さんによるワークショップ「ミニ気球を作ろう」神戸学院大学(2011.12.4)

楽しく生きるための手立て

ギャルリBANYA 前川和昭さん・温子さん

インタビュアー 日沖紗也香・眞鍋大樹

前川　和昭
兵庫県淡路市生まれ。
造形家。

主として、和紙と漆喰による平面造形に取り組む。自邸、長屋門に開設したギャルリBANYAとその庭は淡路島の空気感、風土を活かした空間として注目されている。淡路島アートフェスティバル「2005」では育った田舎屋での記憶をたどる「おばちゃんのたまご」を発表。「2006」では日の出亭の土壁に内部と表面を露出させる「people」を制作。

四国街道の安乎バス停を降りるとコンビニがある。その駐車場から続く小道を進む。すると「ギャルリBANYA」のちいさなプレートが。ガーデニングされた庭を抜けると、門構えが立派な古民家が現れ、ヤギの顔をした愉快な木彫りの人形がお出迎え。入口の一室を改造したギャラリーを鑑賞したあと、インタビューさせていただいた。

人のこころに残るのが芸術

―なぜアーティストになられたのですか？

前川　昔、高校の美術の教師をしていました。創作することは教師としての務めだと思っていたから意識したことはないね。創作はずっとやりたいことだった。けれど、退職してからは私もひとりのアーティストであるということを意識するようになりました。

―アートと教育について教えてください。

前川　ものを創るという共通項がある。授業では、生徒にものを創らせているけど、教える側もものを創ることを考えていなければできないことだと思います。

―私は国語教師をめざしています。

前川　教科は違うけれど、国語も芸術も同じようなところはありますね。国語の授業でどういうことを習ったのかということを思い返してみれば、多くのひとは評論や文法よりも文学を思い出すでしょう。それはやっぱり、文学作品も芸術だからです。芸術はひとの心に残りますからね。国語にも芸術と同じような、ひとの心を動かすおもしろさがありますよ。

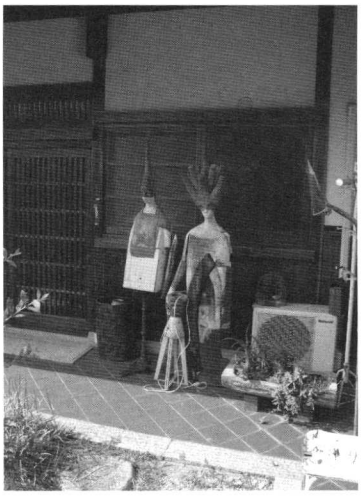
―創作することと、楽しむことの違いはなんでしょう。

前川　違いはあるかな。創るということイコール楽しむということ。そしてまた苦しむということと表裏一体だと思います。

―どんなことが苦しいのですか？

前川　目的が見えなくなって、人の作品の良さばかりが目に映って、自分のものを見失ってしまうことがありました。でも、それを乗り越えるには、自分を信じるしかなかったですね。若い頃は、コンクールに作品を出し

ていたけど、そこで自信をつけたこともあったし、なくしたこともありましたよ。



お話をお聞きしていると、奥様の温子さんがお茶をご用意してくれました。お茶を飲んでから、温子さんも交えて再開しました。

「癒されます」のひと言でやる気が

—『ギャルリBANYA』という名前にはどのような意味があるのですか。

「ギャルリ」はフランス語でギャラリー。BANYAは番屋。昔、客人を泊める宿のことを番屋と言っていたんです。ここはもともと物置として活用していたんですが、改造してギャラリーにしたんですよ。

—ここを始められたきっかけは？

前川　始めはあんまりギャラリーを作るという発想ではなかったんですけどね。

温子　自然体ですね。どんどん作っていって、10年経ったらこうなっていたという感じです。こんなギャラリーになるなんて始めは想像もしていなかったけど、やっぱり作っていくうちにノッてきて、だんだんとこだわりが出てきて、発展していって「ギャルリBANYA」ができたんですよ。

前川　そうしているうちに、部屋だけじゃなくてガレージの方も手を加えるようになってね。

温子　ガレージでは、個展を開いたり作品展をしたり、一般の方にもスペースを貸して展覧会をしたこともあるんですよ。私たちは宣伝をしないから、雑誌に載ったりして少しずつ口コミで広まって人が来てくださいます。営業時間も何にもなしの不思議な空間に、遠いところからけっこう来てくださる。淡路島へ来たついでに来る方もいるし、作品をめざして来てくださる方もいる。

—見に来られる方や地域との交流はありますか？

前川　ギャラリーよりも、庭を目当てで来る方の方が多いかもしれません。

温子　BANYAは分からないという方があるけど、花は敬遠されない分、誰にでも受け入れられますからね。あとは、兵庫県のトライやる・ウィークで中学生が何人か来ましたよ。ここには、働きに来るんじゃなくて、ものを創りにきてるんです。

前川　アートと地域のつながりはそれくらいだね。あまり深入りをしないのは、自分の作品を創る時間がなくなるからですね。自分にはまだ創りたいものがいっぱいあるから、余裕があるときだけ、地域には参加させていただいています。

—やって良かったなと思われますか？

温子　この空間いいねって言われたり、癒されますと言われると、年々、このギャラリーを作ってきて良かったと実感してきますね。それが、工夫したり発展していくことにつながりますね。ギャルリBANYAをめざして来ていただいた方に、庭も見てもらおうと思って、日々発展させていっています。もう少し若かったら、ものを売ったり、お茶を出したりして商売したいんですけどね（笑）。

—ギャラリーを作ったことが創

作活動に影響を与えたことはありますか？

前川　最初は油絵ばかりだったけど、ものづくりをするようになったことかな。それから、ギャラリーを作り、人と繋がることで作品に対する意識が変わりました。それはガーデンに対しても言えることで、楽しみ方が変わったということにもつながりますね。

人のしないことをする

―最近の創作活動について教えてください。

前川　ギャラリーの改造の他では、和紙に白黒で絵を描いています。どんどん描いていて題名はまだないんですけど。ギャラリーの改造も作品づくりも次々とやりたいことが増えます。やりたいことに熱心に手間をかけて、今まで素通りしてきたことや、時間がなくてできなかったことに、挑戦していきたいと思っています。

―オリジナルということですか？

前川　そう、オリジナルを追求したいね。だけど、人の作品が素晴らしくて目移りしてしまうこともあるんですよ。でも、それはあくまでもその人の仕事であって、尊敬はするけどそれと同じことをしても仕方ないですね。その素晴らしさに自分は太刀打ちできるのか、常にチェックしなければならない。それを忘れたら独りよがりになってしまうからね。コンクールに出していた時期もそうだけど、人からヒントを得て、葛藤して自分も洗練されていくんですよ。

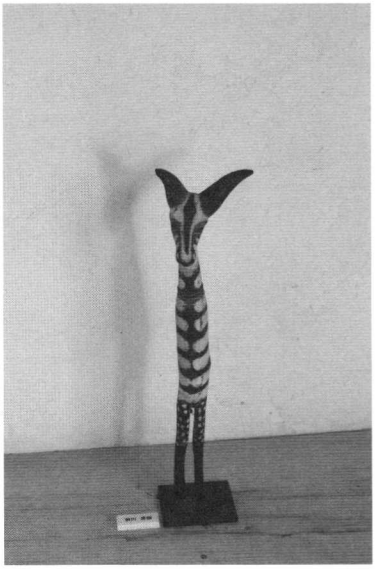
―ものづくりに対する挑戦心や向上心は変わりませんか？

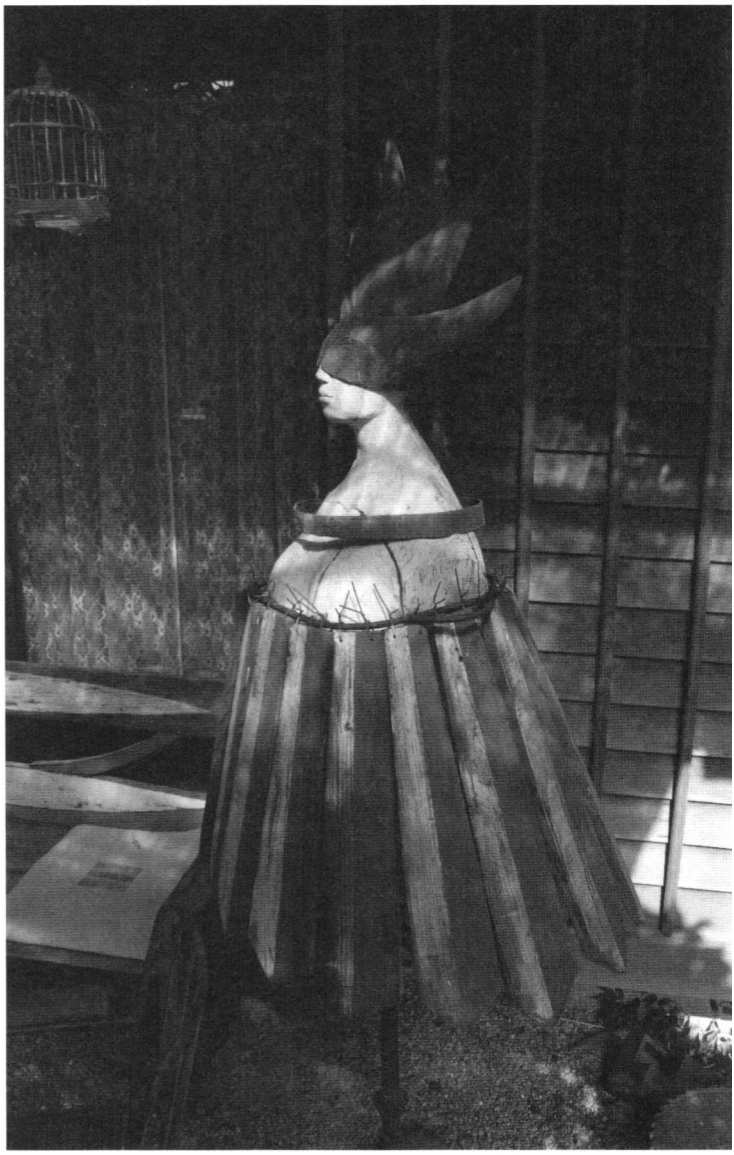
前川　それがなくなったら、ものづくりができなくなってしまうからね。ものづくりへの入口は、ふとしたもので、がらくたの中から突然ひらめいたりするもんですよ。ものづくりはひらめきと考えることの両方があってこそできるもの。どちらかだけでいいものは生まれない。

―最後に、前川さんにとっての芸術とは何ですか？

前川　生きるという手立てかな。楽しく生きるためには、手立てがいるということです。それが私にとっては、ものを創るということだから。何かを創ってみることに関して、自身の手や頭を使って体験してみることで、何かに気づくということが大切です。失敗を恐れずに、とにかくやってみる。失敗してがっくりすることも、ものを創っていくことのひとつだから、失敗も良しと思えるゆとりも大事。時間に追われていては、締め切りのためだけに作品を創るという結果になってしまうから、あまり良いものはできないですよ。やはりそういう意味では、失敗する時間を含めて、やってみる、創作してみるということが大事だと思うよ。

取材が終わってからも、おふたりにいろんなことを話していただきました。帰り際、お庭で育てているすももをいただきました。味はもちろん甘くておいしくて…。前川さんは、「口に入るものを作るのも創造的で楽しい」とおっしゃっていました。芸術に対する考え方ががらっと変わった一日でした。



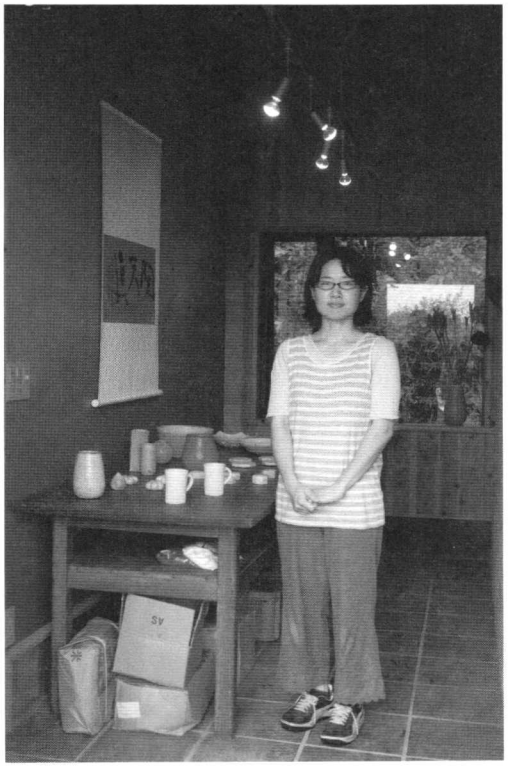


前川さんの息子さんである秀樹さん（彫刻家）の作品も展示されている。

こころを満たしてくれる

うつわ織 宇田賀織絵さん

インタビュアー 杉村亜由美・筒井洸太郎



宇田賀 織絵

1976　兵庫県淡路島生まれ
1999　作陶開始
2001　個展　洲本商工会議所別館
　　淡路市立陶芸館勤務（～2005）
2002　二人展『しあわせのありか』　ギャルリBANYA
　　イラスト/針山千賀子氏と
　　第50回ARTする淡路島展　淡路美術協会賞
2003　個展　東浦サンシャインギャラリー
2004　秋の器展　大阪・peu a peu　forme/art
　　和歌山・愚庵の白秋展
2005　淡路島アートフェスティバル2005
　　秋の器展　大阪・peu a peu　forme/art
　　個展　神戸・ギャラリーLe Port
2006　グループ展・土音遊人　淡路市立サンシャインギャラリー
　　グループ展　十色"ひな祭り"　南あわじ市　薫陶の郷
　　洲本市民講座　陶芸講師
　　陶二人展　大阪・ギャラリー道　周藤香織氏と
　　二人展"陶天眞"　姫路ギャラリーとーく　書・篆刻/南岳杲雲氏と
2007　『ソライロ』展　そらみどう
　　グループ展『淡路島展』　朝来町　宇沙戯舎
　　洲本市中川原町に工房移転
2008　二人展『うまれるかたち』　そらみどう　画/矢吹芳寛氏と
　　『淡路・島じかん』参加
　　登り窯築窯
2010　『ソライロ展』そらみどう

うつわ織　http://assc.o.fiw-web.net/utuwa-ori/

洲本ICでバスを降りた。その後の道のりはタクシーにお願いしたが、行き先を告げると運転手さんが首をかしげてしまった。何とかおおよその位置は把握することができたが、肝心の工房が見当たらない。運転手さんが近所の民家で場所を訪ねてきてくれた。淡路島を知り尽くしたタクシーの運転手さんでさえ知らない場所、それは一体どんなところか。

青々とした水田の間を通りようやくたどり着いたのは、大きな窓と、手作りの窯、そして山々の緑に溶け込んだ草屋根が印象的な工房だった。雨上がりの空気と、見渡す限りの緑が涼しさを感じさせる。

出迎えて下さった宇田賀織絵さんの第一印象は温かそうな人。淡路島で出会った人たちは、みんな温かく、そして家族のようだった。

「このあたりは、『知り合いの知り合いは、みんな知り合い』みたいなものなんです」

―陶芸を選んだきっかけは何ですか？

そうですね…大学に行っていて、就職活動の時、どうしようって考えたんです。それで、やっぱりものづくりがしたかったんで、何となく陶芸を選びました。本当になんとなくなんですけどね。

―では大学も美術系の？

いえいえ。昔から美術の授業が好きで、美術部にも入っていたんですけど、高校生の時、進路指導の先生に「美大に行っても就職ないよ」と言われて。それで大阪にある大学の文学部に行ったんです。けど、「本当は美大に行ったらよかったなぁ。」とかちょっと思った時もありました。絵を描くのも好きだったんですけど、そんなにすごく上手いわけでもないし、小さい頃から何かを作ることが好きだったので、陶芸を選びました。

—じゃあ、陶芸やろう！みたいな感じで？

そうなんですよ。大学を卒業したら陶芸をやるだけやって、向いてなかったらやめようと思っていました。実家がある淡路島に帰って、就職して、仕事をしながら陶芸教室に行ったらいいかなと思って。

—淡路島で働きながら、陶芸の勉強もしながら？

そうです。実は大学卒業の時に、京都の焼き物訓練校も一応受験したんです。だけど落ちてしまって…。

—家族の反対などがあったのでは？

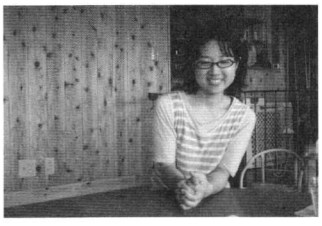
うちの親は最初は結構反対していましたね。けど私は言い出したらきかないタイプだったんで、最後は諦めて「好きにしたら」みたいな感じでした（笑）。

—本格的に陶芸で食べていくことを意識し始めたのはいつ頃ですか？

陶芸教室に行き始めて、すごく楽しかったのでほぼ毎日行くくらいはまってしまって、その頃ですかね。働きながらお金を貯めて、いつか自分で窯を買って陶芸したいな、って。就職活動の時、集団行動がちょっと苦手だなと思ったので、ひとりでできる作業を仕事にしたいというのもありました。それでずーっと陶芸教室に行って勉強していたら、先生が東浦町の陶芸体験館で陶芸の講師を募集していたのを紹介してくださって、そこで三年くらい働いていました。

—ずっと淡路島で陶芸をやろうと思っていたのですか？

あんまり都会とかに興味がなくて…。どこにいても自分は自分かなと思うし、今ならネットもあるから、あえて都会に行かなくても…って。最初は淡路島ってすごい田舎で嫌だったんですけど、大学に進学して大阪に出て行ったら、淡路島もいいところやなって逆に思ったんです。のんびりしすぎてるところもあるけれど、やっぱり食べ物もおいしいし（笑）。自然もほどよくあって、街もそこそこ近いからそんなに不便じゃないんですよ。



—淡路島のいいところ、とは？

人柄ですかね。淡路島の人ってみんなすぐに仲良くなってしまうんですよ（笑）。初対面の人にもタメ口で話しかけたりして。それがいいのか悪いのかは分からないけど、そこが淡路島のいいとこでもあるのかなって。宅急便のおっちゃんとかも玄関に座って「暑いなぁ」って言うから、私も「お茶出しましょうか」みたいになにか一言喋ったりして帰るみたいな（笑）。今、この家があるこの土地も、「管理する人がいないから使うか—？」みたいな感じだったんです。近所の人も野菜をおすそ分けしてくれたり、お散歩がてらふらっと工房に寄って、作品を見てくれたりして。その辺りに淡路島の人の繋がりを感じますね。

—陶芸の魅力とは？

自分の手で作ることができる。土自体柔らかくて触っていても気持ちいいです。あと、やっぱり作ったものを他の人が使ってくれて、それで人と繋がっているみたいな意識はすごくあります。一人で作業しているけど、他の人がそれを使ってくれるこ

とで、繋がることができるのが、焼き物のいちばんおもしろいところかなと。

入れるものによっても変わってきますしね。コンビニで売っているお惣菜でも、器を変えると豪華に見えますよね（笑）。まぁ自分の食卓で使うのはほとんど失敗したものばかりなんですけど（笑）。

―他の淡路島のアーティストについては？

他のアーティストに織物のコースターをいただいたら、それに合わせてコップを焼いてみたりなど、お互いアーティストの作品に合うような作品を作りあったり。他に淡路島で焼き物をやっている人も、それぞれみなさん違っていて刺激になります。

―作品のアイディアはどんな時に湧くんですか？

いろいろですね。ぱっとこれを作ろうと思ったりもしますし、これを作ろうと思ってても、作っている途中で「へんやな」と思って変えたりもします。「こんなサイズのこんなものが欲しい」と頼まれた時も、それでアイディアが湧くこともあります。あとは、散歩の途中とかも多いかもしれませんね。この辺りの道は、近所の方も散歩コースになってるんですよ。

―お子さんの誕生は、作品に何か影響を与えましたか？

実際にかたちになってはあまり現れてないかもしれないですけど、子供ってやっぱり特別な存在で。今までも作品を自分の子供みたいな感じで作ってたんですけど、余計に子供のように意識しだしました。

育児の間に作品を作るんですけど、なんか開放感があって。肩の力を抜いて作品作りに集中できるようになりました。焼き物がなかったら育児疲れになっていたかも。土に癒されてるみたいな（笑）。今は育児と趣味がいい感じに両立できています。

―お家は草屋根ですよね。

最初から何となく草屋根にしたいというのがあって。でも最初は夫に反対されたんです。けど最終的に草屋根にしちゃいました（笑）。屋根に上がって、第二のリビングになればいいなという感じで作ったんですけど、今はあまり使ってないかな。

―旦那さんとの馴れ染めは（笑）？

大学を卒業して淡路島に戻ってきて、洲本のイベントスタッフをしたんです。その時に…ですね。バイクをいじったりなど、もとから物をいじったりするのは好きだったみたいです。でも陶芸はしなくてほとんど私の雑用係みたいな。でも、主人が創作活動に理解のある人でよかったです。

―将来の目標や、これからやってみたいことは？

とりあえず子育てが一段落したら、もう少し本格的に活動したいです。今、土は市販の信楽や瀬戸の方の土を使っています。たまに夫が取って来てくれた土も使ったりするんですけど、将来的には淡路の土…淡路産の物で作りたいなと。これからは100％淡路産でみたいな（笑）。

―では最後に、あなたにとって芸術とは？

なんでしょうねぇ…私は自分が芸術家とは思っていないから、それに答えるのはおこがましいかなと思いつつ…。作り手としては、いちおう一言で言うと「心を満たしてくれるもの」という結論になるのですが。なくてもいいような気もするけど、やっぱりあるほうがいいし、ちょっとしたものでもかわいいなと思ったり、良いなと思ったり…。そう思うだけでも自分の気持ちが落ち着いたり、心が豊かになったりとか。なんか、使っていていいなとか、楽しいなとか思ってもらえるようなものを、少しでも作っていければいいかなと思いますね。

人を温かくする品のあるもの

樂久登窯 西村昌晃さん

インタビュアー 佃駿介・松下裕貴

西村　昌晃

1978年　神戸市出身。

1999年　丹波立杭焼き　清水俊彦氏に師事

2005年　淡路島に樂久登窯を開く

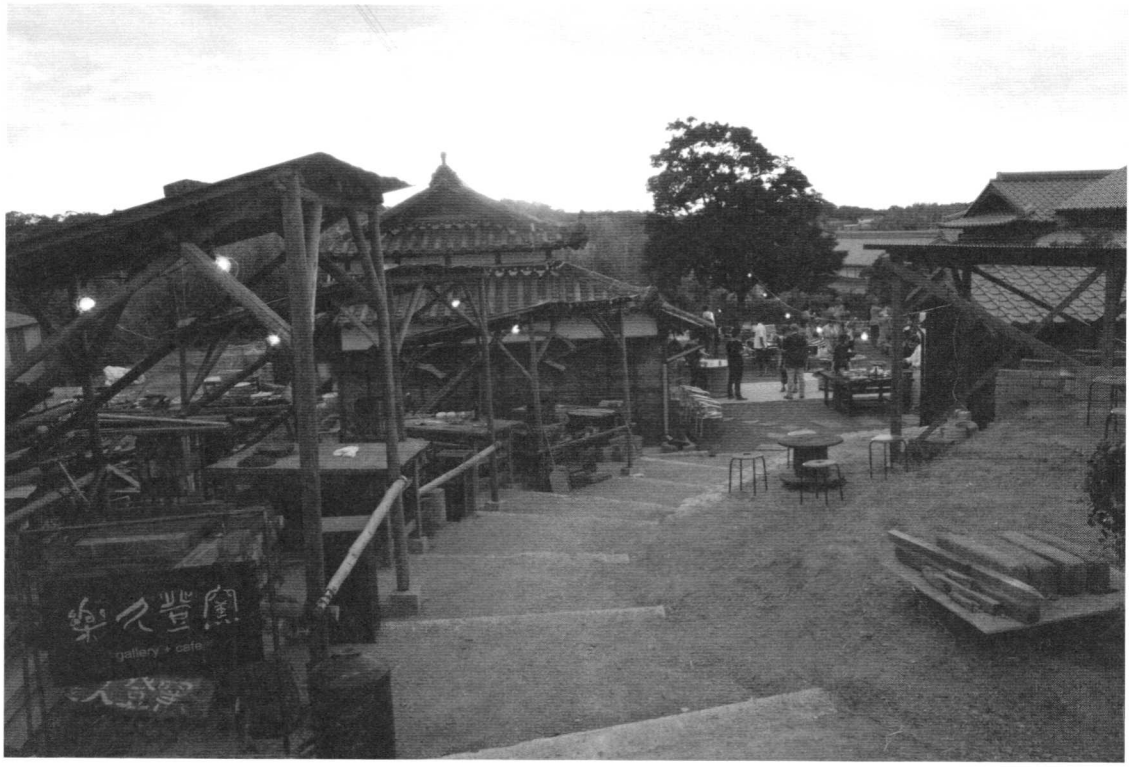
2007年　神戸にて初個展開催

樂久登窯　http://rakutogama.com/

夏の淡路島。照りつける日差しのもと、潮風が吹きつける。南あわじ市の西海岸、景勝地「慶野松原」を通り過ぎ、五色浜海水浴場あたりで山の中へ。田畑の鮮やかな緑が太陽に照らされてまぶしく映える。いかにも田舎な農村風景の中に「樂久登窯」の看板がひっそりとたたずんでいる。しばらく行くと和モダンな建物が唐突に現れた。訪れたことを告げると、半パンにTシャツ姿の西村さんが現れた。

―なぜ陶芸の道に入られましたか?

みんなも同じだと思うけど、したいことよりやりたくないことのほうがはっきりしてるでしょ。僕も同じで、小学生の頃にはすでにしたいことよりやりたくないことのほうがたくさんあった。それで高校生になって、いざ、働くということを意識するようになった時に、サラリーマンはいやで、公務員も違うなぁと。得意なことは絵を描くことだった。でも、絵を描いて自分が稼いでるイメージがわかなくて…。と、いろいろ考えてたどり着いたのが陶芸の道でした。だから、はじめから陶芸と決めていたわけではないんです。陶芸という道があるということは学校の先生に教えてもらいました。知らないことを教えてくれたり、チャンスやヒントをもらえたり、人との出会いはほんとうに大切だと思います。



―学校を出られて以来、陶芸家の道を歩まれていますが、別の世界も見てみたいと思われたことはありますか?

陶芸しかしていなくても別の世界もたくさん見ることができる。自分がやることはひとつでも良いと思ってます。何をしていても出逢いがあれば、そこからは自分次第。相手の仕事を自分の仕事に置き換える事ができれば、相手の事をより理解できる。そこから今まで知らなか

った新しい世界を覗くこともできる。結論的には出逢いを大切にする。人が本当に大事！ということです。

―いろんな人と知り合うために積極的に外に出ていかれたりは？

淡路島に移り住んだ頃は自分から出て行ってました。ギャラリーができてからは、いろんな方に来ていただけるので以前よりも出て行かなくなりました。なぜみんな来てくれるのかというと、旅行雑誌などいろんなメディアに取り上げられるようになったということもありますが、一度ここを訪れた人たちの口コミも大きいと思います。それなりの期待を持っているから、こんなへんぴなところに来られるのでしょうね。頭で考えるより心で動くとよい結果に繋がってます。淡路島は橋を渡り高速代も高いですが、それでも来てくださる方には感謝しかないですね。

―樂久登窯には工房とギャラリーとカフェがあります。隣どうしにあるのに、雰囲気がぜんぜん違いますよね。

樂久登窯のテーマは、「街から来た人が楽しめるみんなの田舎」。作りだしたらやっぱりかっこよくしたい。だからはじめの構想とぶれてくることもある。けど、自分がワクワクして楽しめているかどうか、それが大事なんです。来ていただく人に驚いてもらえるような仕掛け、「カフェは田舎っぽいのにギャラリーは都会風」というようなことはもちろん計算してます。

―陶芸家は工房に籠もってコツコツもの作りという印象がありますが、樂久登窯はそういうところとは少し違いますよね。

みんなが集まれる楽しい雰囲気の場所を作りたかったからで

す。ギャラリーやカフェを作った理由も同じ。ここはもともとおばあちゃんの家だったからね、意気込まないで好きなことができればどこでもよかった。淡路島に来てよかったことは、田舎だけど都会が近いことと食べ物がおいしいこと、親切な人が大勢いること、なによりもいい仲間に出会えた事です。

―「炎と戯る」というイベントは、淡路島の料理人の方々が炎だけで調理され、西村さんの器に盛り付けられた料理をいただくというイベントで、たくさんの方が来られたということですが。

田舎で本物を味わってもらって、心が温かくなるイベントをしたかったんです。唯一こだわっていることは本物かどうかということ。イベントをする時、淡路島のためとか地域のためとかという理由でする人もいます。僕の場合は、自分が感動したいからやっています。それが結果

として地域のためになったりすることもあるのかもしれません。

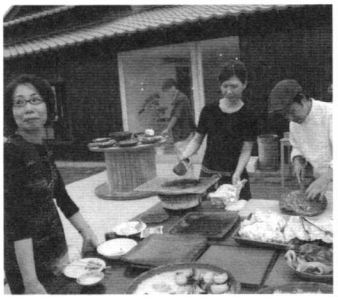
―器についての考えを聞かせてください。

器に触れてもらって穏やかな気持ちになってもらえればと思います。新しくできる料理屋さんが店で使う器を作ってほしいとか、そういう話が来た時は燃えます。相手の顔を浮かべながら、どんな器を作れば料理が映えるだろうと。そういうオーダーが来て、格闘する中から生み出されていくものが自分の作品かな、と思います。

―最後に、西村さんにとって芸術とは?

自分の作品をアートとは思ってないけど、人の気持ちを穏やかにしたり、生活を豊かにするものが芸術だと思っています。どんな作品にも品があってほしいと思っています。

関係者を招いておこなわれたノープランパーティー in 樂久登窯（2011.9.5）



淡路島を耕す

NPO法人淡路島アートセンター事務局長
やまぐち くにこさん

インタビュアー 横田康平

やまぐち　くにこ

1969年　淡路島出身。淡路島アートセンターの事務局長と企画を担当している。通称「淡路島を耕す女」として、凝り固まった価値観を耕し、自然から溢れる創造と想像の喜びを育てることを使命としている。

NPO法人淡路島アートセンター
http://awajishima-art-center.jp

淡路島のアーティストの活動を陰ながら支える淡路島アートセンターというNPO法人がある。スカっと晴れた6月28日、淡路島アートセンターの事務局長であるやまぐちくにこさんにお話を聞いた。

2004年の台風がきっかけ

横田　よろしくお願いします。まず、淡路島アートセンター（以下AAC）なんですけど、僕的な解釈では、「アートを通して島民のみなさんと新しい可能性を見出していく」ことを目的としていると捉えたんですけど。

やまぐち　そうですね、島内外問わず淡路島で展開されているアートを外に発信していくというのが大きな目的です。それを通じて、淡路島の住民が改めて自分たちが住んでいる島の魅力を確認したり、新たな価値に気づくと。

横田　なるほど。

やまぐち　AACを立ち上げたきっかけになったのは2004年の台風23号なんですけど。

横田　日の出亭[*1]ですね。

やまぐち　そうそう、それでなぜNPO法人にしたかというと、地域に入っていくにあたって、いきなり「アート」と言うとちょっと敬遠されるので、法人格があった方が安心してもらえるかと思いまして。

横田　ありますよねぇ「ヘンな絵描いてる～」とか。

やまぐち　食わず嫌い…じゃないですけど。誰でもそうですけど、わからないモノに対してはちょっと避けたがるんですよね。だからこそ、私たちが重視したのは島外への発信なんです。島の外の人たちにまず認めてもらうことで、逆に島の人たちにも私たちAACの活動を理解してもらおうと。具体的には、アサヒビール芸術文化財団に協賛してもらい、その寄付金や助成金を使ってアートイベントをしたりとかね。

桑島　助成金をもらうという

「プライベート・パブリック・プール」（タノタイガ 作）　淡路島アートフェスティバル2010

↑噴水跡を利用した仮設プールに近隣の子供たちや親が訪れ、フェスティバル開催期間中はかつての賑わいを取り戻した。

←かつては賑やかだった市営駐車場（洲本市）の屋上公園はすっかり寂れ、廃墟と化した噴水跡が残る。

とはお金だけの話ではない。

やまぐち　そうなんですよ、そこなんです。金額じゃなくて、信用を得ることができるんです。あのひとたちがやってることをアサヒビールさんがバックアップしてくれるんだから、なんやわからんけどちゃんとしてるんやと、地域の人々の私たちに対する見方も少しづつ変わっていきました。アサヒ・アート・フェスティバル[*2]に参加させてもらって、淡路島アートフェスティバルもできましたし、非常に大きかったですね。

広がったネットワーク

桑島　アサヒ・アート・フェスティバルに参加することで全国のアート系NPOと横のつながりができるんですよね。ほかの団体の活動とかを知って、いろいろ参考になったんじゃないんですか？

やまぐち　そうですね。他の地域がどんな活動をしているのかかなり意識しています。みんな私たちとよく似た問題を抱えていたりします。プロジェクトを進めていくためには、そういう問題をひとつひとつ突破しなければいけない。そんな時、連絡を取り合って、情報交換しています。「どうしてる～？」って電話かけて、「野外のイベントってどれだけ保険掛けるんかな？」とか、気軽に相談できるネットワークができてますね。

横田　なぜ、そんなに仲良くなれるんですか？

やまぐち　アサヒ・アート・フェスティバルでは、参加する団体すべてが実行委員会に参加し、それぞれがどんなイベントをするのかをプレゼンします。7月には、フェスティバルのオープニングをみんなで集まって行います。そして最後に報告会と、1年で3回はかならず東京に行ってメンバー全員が集う。そこでほかの地域の担当者の方とお会いして、それぞれの団体が抱えている悩みだったり、その時の共通の課題とかを話合う。そういうことを通じてネットワークができてくるんですね。

横田　絆が強くなっていく。

やまぐち　別府プロジェクト[*3]は、同じころに法人格を取ってるんです。いわば同期なんですが、向こうが大きいプロジェクトとかやってると「負けたくないな――」とかね。そうそう、はじめてアサヒ・アート・フェスティバルに参加した時、いろんな方から「バカもの！」と言われましたよ。

横田　ええ!? なんでですか！

やまぐち　淡路島ではじめてアートイベントをするというのに、わかりやすいアートじゃなくて、現代アートみたいなむずかしいところに足を踏み入れて、あなたたちはいったい何をやろうとしているんだ!? と。もちろんそれはほめ言葉で、その無謀さに他の地域が拍手してくれました。2007年には「全国アートNPOフォーラム in 淡路島」を洲本の旧紡績工場赤レンガ倉庫で開催しました。赤レンガ倉庫はレトロないい建物なんですが、それまで使われてなくて、この時に初めて扉が開いたんです。皆さんの力をお借りして、何かとみんなが持ち上げてくれたんです、「淡路島ガンバレ」みたいな感じでね。何でガンバレなのかというとね、みんな心配なんです。淡路島アートセンターはみんな素人だから危なっかしいというか。普通だったら学芸員なんかがいるんですけど、私たちはOLとかアート好きの公務員とか、本当にどこにでもいる人なんですよね。

横田　ホームページで見ましたけど、イタリア料理のシェフもいらしゃいますよね。

やまぐち　そう、そういうメンバーが集まってやってるということで、応援してくれる。

海の見えるビニールハウスレストラン　石屋神社前の海岸で1日限定で開かれたイベント。ビニールハウスを改装したレストランを開いた。(2010.10.13)

ノマド村で考え方が変わった

桑島　アートイベントって、その期間だけ別のところからアーティストがやってきておもしろいことして、その間だけは地域も元気になる。けどイベントが終わったらそれでおしまいというケースがほとんどじゃないですか。淡路島は、いろんなアーティストが根を生やして芸術活動しているから、イベントがあってもなくてもおもしろいですよね。

やまぐち　私もそこに目をつけてるんですよ。これまでは発信ということに力を入れてたんですけど、もちろんそれは今後も続けていくんですが、これからは「アーティストに定住してもらう」ことに力を入れていきたいですね。

２００９年、茂木綾子とヴェルナー・ペンツェルがスイスから淡路島へやってきて、ノマド村[*4]を作ったというのが私たちにとってすごく刺激になりました。芸術に対してはやっぱり私たちは素人なんで、正直、本気で芸術している人ってどんな感じなのか分かっていませんでした。それが茂木さんたちの生活を通して、こういう生き方が本物なのだと私たちは気付かされたわけです。そうなると上っ面だけのアートイベントなんてできなくなった。その場限りのお祭りなんてできない。彼らの本気さを見て、そんなうわべだけの舞台を作ってはいけない。私たちも本気でかからないといけないと思いました。「みんな素人で平日は仕事だから、活動は土日しかできません」という逃げはもう許されないなと。

桑島　ノマド村って、最近よくマガジンハウスとかメジャーな雑誌によく取り上げられてます。近所にいてると分かりませんが、あんだけ注目されるってことは、東京のひとたちにしてみれば凄いことなんでしょう、きっと。

やまぐち　茂木さんやヴェルナーさんがどんな芸術家なのか、私も知らないことが多かったんですよね。関わっていくうちにいろんなことが分かってきて、こういうところが注目されるんだなって分かりましたね。

桑島　淡路島が雑誌で取り上げられるというと、今まで「るるぶ」みたいな旅行とかレジャーの本でしかなかった。それが、淡路島の山の中にある長澤地区が、ブルータスというスタイリッシュな雑誌で、見開きで取り上げられているって、淡路島にとっても画期的なことですよ。

アートが地域を元気に

桑島　横田くんはイギリスに行ったことがあって、イギリスのこと聞きたいらしいです。

やまぐち　あら、すごいね！

横田　高校の修学旅行で行ったもんで…。とりあえず食事がまずかったでしょ？

桑島　そんなんどうでもええねん（笑）。で、イギリスでは地域のためにアートが活躍しているんですよね。

やまぐち　イギリスにはアーツカウンシルという文化芸術に関する公的な助成機関があります。地域の文化芸術に関わる活動に対して、助成金を出したりする組織ですね。この機関のサポートを得て、いろんな団体が地域社会にアートを浸透させてます。たとえばあるコンテンポラリーダンスのＮＰＯでは、ストリートチルドレンや受刑者、服役後の若者といった人々にダンスを教えていて、再犯率の低下にも役立っている。

横田　他の団体ですけど、浮浪者の方に演劇を教えてたりしてるんですよね。

やまぐち　なぜ、ストリートチルドレンにダンスなのか？　とい

うことを現地で担当者の方にお聞きしたんですけど、例えばスラムみたいなところだと、人に当たったり触れたりすることから喧嘩が起きるんですよ。なぜそうなるかというと、人に体をゆだねたりとか、人とふれあう経験がないからです。

桑島　人間不信なんやろなぁ。

やまぐち　そうなんですよ。そこでダンスをやって、自分を表現して、そういう自分を他者に受け入れてもらうことで、信頼関係を得る。だからダンスを教えるんです。ストリートダンスとかヒップホップとかカッコいいやつね！

うまく踊れるようになって、自分に自信がついて路上で踊れるようになる。そういう人たちに舞台でスポットライトが当たるようなイベントを組んで、みんなに拍手してもらってどんどん自信を持ってもらう。その中にはお年寄りや車いすの方も参加していて、レッスンや最後の舞台まで見たんですけど、もう、スゴいなぁって思いましたね。本番でおじいちゃんおばあちゃんが大人数でハンカチを振ったり…。

横田　ノリノリなんですね。日本でもやればいいのに…。

やまぐち　でもダンスの文化って日本にはないからねぇ。なかなか浸透しないし。小っ恥ずかしいっていうのもあるでしょうし。暗闇レストランっていう視覚障害者の人達が運営するレストランがあって、入口のカーテンの向こうは真っ暗で何も見えないんですよ。視覚障害者のウエイターさんの肩に手を置いて、席まで連れて行ってもらう。テーブルにはコップやビンが置いてあって、自分で水を入れるんです。コップに指を入れてどのくらい入ってるか測るとか、指の感覚のみでどうにかしなきゃいけないんですよ、もう全く何も見えないところなんでね。でも視覚障害者のウエイターは、椅子の配置とか覚えていて、料理がなくなるとサッと持って行くんですよ。

横田　へ〜！

やまぐち　お客さんは周りが見えないから、ふだん以上に隣の人としゃべるんですよ、「この料理おいしいね」とかずーっと話すんです。

五感で感じるものがアート

横田　あの、言っちゃあなんですけれども、それってアートなんですかね？

やまぐち　ああ、そっか、そういう風に感じるのよねぇ。あのー私が思うに、アートっていうのは作品に表現されてるものと、それを見ている自分の間に生まれる感情がアートだと思うんですよ。つまり作品そのものではなく、その作品を見たり触れたりして、五感に感じたものがアートだと。例えば、怒りでもいいんですよ、こう感情が動かされる仕掛けがアートだと思う。

桑島　絵だけやなしに、形にならないものでもアートになるんですね。

やまぐち　私はそういう風に認識してますね、だから、暗闇レストランみたいに視覚障害者がレストラン、というような場所で健常者の方を誘導するという試みというのもアートだと思うんですよ。人々に発想の転換を促すというか、それもアートだと思います。

横田　それを耕すのが…

やまぐち　そう、それが私たちの仕事。

桑島　どんどん時代と共に広がってますよね、アートの概念って。絵じゃなかったからアートじゃない、みたいな考え方をする人はまだまだ多いけど。

横田　えー、だってそれぐらいしかイメージないですよ！

やまぐち　うん、わかってくれたらうれしいなぁ、決して美しいものだけではなく、本当に腹立たしくて目も背けたくなるようなものもまた感情が動かされる、そういうものがアートなんですよ。

桑島　アートで社会も変わる。

やまぐち　であろうと思っている。

横田　その活動をしているうちに、社会は変わっていくと。

桑島　もっと深い意味で社会を変えていくのもアートなんだよ。ヨーゼフ・ボイスが「人間はみなアーティストだ」って言ってたやん。

やまぐち　そうだと思います、おんなじ考え方ですよ。

特殊メイクのアーティストは牛乳屋さん

横田　個人的に気になってたことなんですけど、5月に「赤い晩餐に魔女は笑う」っていうイベントを開催してたじゃないですか。あれの宣伝に書いてあった「アワジックホラー[*5]」って何なんですか?

やまぐち　ああ、アワジックホラーさんはユニット名ね。特殊メイクのメイクアップアーティストの夫婦なんですよ、普段は牛乳屋さんですけど。

横田　ええ!?牛乳屋!?どういうことですか!?

やまぐち　やっぱりアートがしたくても生活があるから、そのために本業も必要なわけで、それでたまたま彼らは牛乳屋さんなんですよ。

横田　特殊メイクの技術を持っている牛乳屋さん!?

やまぐち　彼らの家行くとメチャクチャおもしろいよ。家のいろんなとこに仕込みがあって、トイレとかもう怖くて行けませんよ。目玉転がってたり、壁に血がブワーってついてたり、等身大のモデルに浴衣着つけて髪の毛がダラ〜ってのが真横にいたりする。

横田　朝に牛乳を配って、夕方に牛乳を仕入れて、その合間にアートを…。

やまぐち　そうですね、夜に制作してはりますね。

横田　言ってみれば、趣味ですよね。

やまぐち　でも、お店の前におくオブジェとか、食品サンプルとかいろんなものが作れるから、そういう仕事もあるみたいです。

横田　なんか淡路島ってすごい人が住んでますね。仕事にはならないけど、アーティスティックな…。

やまぐち　そうそう、このおふたりみたいに日々創造に取り組んでいる芸術家たちが、思う存分活動をできるようにバックアップする。それも、私たちAACの役目だと思います。

*1 日の出亭

2004 年の台風災害において奇跡的に出会った一軒の空き家。アートセンターの始まりの場所であり、憩いの場。土砂崩れによって半壊状態で発見された日の出亭は、アートセンターのメンバーによって少しずつリノベートされ、今では生活が出来るほどになっている。

*2 アサヒ・アート・フェスティバル

アサヒビールと全国のアート NPO や市民グループの手によって、毎年夏に全国各地で実施されるアート・フェスティバル。
http://www.asahi-artfes.net/

*3 別府プロジェクト（BEPPU PROJECT）

世界有数の温泉地として知られる大分県別府市を活動拠点とするアート NPO。この町で、国際芸術フェスティバルを開催することをマニュフェストに掲げ、2005 年4月に発足して以来、現代芸術の紹介や教育普及活動、人材育成講座や出版事業、市街地の空き店舗をリノベーションする「platform」制作事業など様々な事業を実施している。
http://www.beppuproject.com/

*4 ノマド村

4年間スイスで展開されたアートプロジェクト <Laboratoire Village Nomade> を運営したジュパジュカンパニーは、2009 年、日本の淡路島に拠点を移し、旧生穂第二小学校に居を構え、「ノマド村」と改名して、新たな活動を開始した。 団体の中心メンバーは、ドイツとスイスで活動してきた写真家、映像作家の茂木綾子、ドイツ人映像作家のヴェルナー・ペンツェル。地域の人々や国内外からの参加者、訪問者たちと共にこの場を作り上げる、ソーシャル・スカルプチャーとして活動する。
http://www.nomadomura.net/

*5 アワジックホラー

2006 年に結成したユニット。淡路島在住の特殊メイクアップアーティスト夫婦。
http://awajic-horror.zombie.jp/index.html

窓から見える海にこころが安らぐ（アート山大石可久也美術館）

ライブやイベントも楽しめる（カフェ・ノマド）

工房の横にカフェとギャラリーがある（樂久登窯）

伝説の造形作家、エノチューも訪れる隠れ家的なカフェ（ナフシャ）

手作りの内装が懐かしくて暖かい（工房風南）

なぜ淡路島のアーティストはカフェをひらくのか？

淡路島には、都会では
考えられないようなところに、
アーティストやっている
個性的なカフェがある。

桑島紳二

巷でさかんな現代アート

最近、現代アートのイベントが盛んだ。昨年関西では、行政が関与する「神戸ビエンナーレ」や「おおさかカンヴァス推進事業」。「六甲ミーツ・アート」、「飛鳥アートプロジェクト2011」、「龍野アートプロジェクト」、「鉄道芸術祭」などの観光振興を狙ったもの。「歌とピクニック in tamba」、「AMA展」、「木津川アート」といった地域密着型など、昨年はいろんな地域でアートイベントで行われた。

過疎地を舞台とした現代アートのイベントで成功した「西の直島、東の越後妻有」によって、現代アートが地域活性化のための有力な手段であるという認識が広まり、今では自治体がアートをまちづくりに活用するようにもなっている。その中には、ブームに乗り遅れまいと、安易なかたちでアートをイベントに組み込むといったケースも見受けられる。

アーティストが開くカフェ

淡路島に居住し地域に根ざして創作活動を行いつつ、カフェやギャラリーを開くアーティストがこのところ増えている。食事や語らいの場を提供するに留まらず、作品発表の場であったり、ワークショップを行ったり、ミュージシャンを招いてライブを行ったりと、アートを通じて地域内外の人々が活発に交流している。生活者として地域に溶け込んだアーティストが今までにないコミュニティーの「場」を作り、地

淡路島にできたアーティストによるカフェやギャラリーなど

アート山大石可久也美術館（2004年）
ナフシャ（2007年）
ノマド村（2009年）
淡路島美術大学（2010年）
樂久登窯（2010年）
工房風南（2011年）

域住民のひとりとして地域の人々と交流し、「訪れる人」と「迎える人」というアーティスト・イン・レジデンス的なものからもう一歩踏み込んだ関係が築かれている。そんなコミュニティーが島のあちらこちらにあり、緩やかに交流している。

昨年、淡路島在住の芸術家を対象にアンケート[*1]を実施した。その結果、アンケート回答者の75名のうち、20％が「附帯施設としてカフェなどを設けている」と答えている。その理由について優先順位を尋ね[*2]たところ、「交流するため」を第一と答えた人が9名。「現金収入を得るため」については第一と答えた人は皆無であり、第二と答えた人は3名に留まった。プロのアーティストにとってカフェの売上げは貴重な現金収入だが、支援するしないに関わらず作品を披露する対象となる者の存在が欠かせない。そのあたりの淡路島の事情について、淡路島美術大学を主宰する岡本氏は、「都会には白い箱のような展示スペースを持った美術館やギャラリーがある。アートに興味がある人も多くいる。でも淡路島はそこが弱い。だから、カフェだったり、『あわび』[*3]だったり、ギャラリーとか、それに近いものを自分たちで作ったり、またそれ以上の新しい何かを生み出そうという気持ちになる。表現を公開するシステムから作っていかなければならないところがエキサイティングだし、とてもおもしろい。[*4]」と語り交流することを非常に重要な要素として捉えている。

淡路島でアートを展示するスペースとしては、主だったところは「兵庫県立淡路文化会館」、「淡路市立ひがしうら文化館サンシャインホール」、「洲本市民工房」ぐらいであり、プロのアーティストが発表する場としてはいささか物足りない。これ

＊1 淡路島における「芸術文化の地産地消」アンケート調査（2011）

＊2 「カフェを設けた理由」について以下の4項目から優先順位を選択。
現金収入を得るため・交流するため・ネットワークづくりのため・その他

＊3 本誌 P33
岡本純一氏が主宰するアート空間である淡路島美術大学

＊4 本誌 P35

はアーティストにとっては望ましくないようだが、それをそう捉えてしまうと淡路島でアートはできないのである。

カフェ・ノマドを開いている茂木氏はカフェをする理由について、「アートという枠組みだけだと、一般の人は入りにくい」、「カフェだったらアートに興味がない人でも気軽に来られるんじゃないかと思って」[*1]と語っている。例えば入場料が1000円の展覧会は高いと感じても、カフェでそれくらいのお金なら躊躇なく使ってしまう…それがアートにさほど関心のない一般人の心理である。そうであるなら、カフェという体裁を取って、店内にアートを置けばそういう人々にも見てもらえるのではないか――というのが茂木氏の考え方である。

アートで地域の問題に向き合う

前述のアンケートでは、淡路島で活躍するアーティストの出身は、淡路島以外が約43%、Uターンしてきた人が約41%で、ずっと淡路島に在住している人の約15%に比べると圧倒的に多い。また、アーティストが「淡路島を選んだ決め手となったこと」について尋ねたところ、約33人が「自然環境がいいから」、約23人が「生活環境がいいから」という回答を選択した。[*2]

このように生活環境や自然環境に惹かれて淡路島で創作活動を行っているアーティストが半数近くを占めるわけであるが、人口減少や少子高齢化、雇用縮小とい

---

*1 本誌 P20

*2 「淡路島を選んだ決め手となったこと」について以下の10項目から複数回答可で選択。都会に近いから・都会にいなくても不便を感じないから・創作活動に集中できるから・創作に適しているから・創作意欲を刺激してくれるから・生活環境がいいから・生活費が安いから・自然環境がいいから・地域住民が支援してくれるから・その他

う問題を抱える地域でもある。そのひとつの現れが廃校問題である。

淡路島は大学や雇用規模の大きな職場が少ないため、若い世代の島外への流出が続き、人口減への有効な歯止め策は見つかっていない。子供を産み育てる世代の少なさが少子化に一層の拍車をかけている。少子化を如実に示しているのが児童・生徒数の推移である。第二次ベビーブーム以降、小学校の児童の場合、ピーク時の昭和55年度の1万5133人が昨年度は7433人に、中学生は昭和61年度の7634人が昨年度は3959人にまで激減[*3]し、学校園の統廃合、閉校が続いている。地方の学校は単に教育機関ではなく地域のコミュニティーセンターとして機能しているところが少なくない。そういう意味においても、廃校となった施設を人が集う場へと、なんらかのかたちでよみがえらせることが求められる。人口減が進むどの地域も抱えるこの問題を打開するひとつのモデルとして注目されているのがノマド村[*4]である。

よみがえる廃校

アサヒ・アート・フェスティバル[*5]への参加を通じて全国の様々なアート系NPOのネットワークを持つ淡路島アートセンターのやまぐち氏に、2009年5月、さまざまなアート、環境関係プロジェクトを展開している芹沢高志氏から「ヨーロッパで活動してきたアーティスト3人、が関西圏域の自然が豊かな場所に移住したいと考え

---

*3 未来映す島のとり組み 産経新聞大阪朝刊（2007・5・21）および、淡路教育要覧 兵庫県教育委員会 淡路教育事務所（平成23年度）

*4 本誌 P16

*5 **アサヒ・アート・フェスティバル** 全国のアートNPOや市民グループ、アサヒビールなどが協働で開催するアート・フェスティバル。「市民」が主体となって、「未来」を展望し、「コミュニティ」の再構築をめざすアート・プロジェクトがネットワークされ、様々な活動を続けている。

ているが思い当たる場所はないだろうか」[*1]という話がはいった。ぜひ淡路島に来てほしいと思ったやまぐち氏がその話を淡路市の国際交流課に持ちかけたところ、市では、ちょうど廃校の活用が問題[*2]になっており、とんとん拍子で話が進んだ。その後、一般公募による廃校活用のプロポーザルを経て、アーティストによりカフェの運営を提案した淡路島アートセンターが採択された。そして11月から旧生穂第二小学校はノマド村として活動を開始し、翌年3月に「カフェ・ノマド」がオープンした。

校舎は1976年に建てられた鉄筋コンクリート2階建ての約1千平方メートル。元職員室がカフェになっている。運動場奥にはアート展示などに使用されるパオが置かれている。

淡路島の山間にある廃校となった小さな小学校。そこに住んでいる芸術家の家族が土日だけアートなカフェを開く——そういうロハスな暮らしぶりが評判を呼び、雑誌メディアに取り上げられ、地域はむろんのこと、島外からも客足が絶えない。また、廃校利用の成功例としても注目され、遠くは東京からも視察に訪れる。

社会を彫刻する

長澤地区は棚田が美しいのどかな山村である。地域の中心にあった小学校が廃校になり、地域住民の精神的支柱が失われようとした時、その廃校にアーティストが移り住んできた。そして、彼らは地域にあった素材すなわち廃校になった小

---

*1 「アートNPOデータバンク2010」(発行元：NPO法人アートNPOリンク) P50

*2 淡路島の廃校利用
人材大手派遣会社・パソナグループが、野菜加工場やレストランとして稼働する予定で進めている旧野島小学校（2010年廃校）。眼鏡などを製造しているメーカーである山本工学が、旧北淡東中学校（2004年廃校）を改築し、工場として稼働している。

学校、美しい景色、自然の恵み、地域の文化といったものを自分たちの視点で再解釈し、地域住民とともに新しい物語へと編み直した。それが地域や島外の人からも支持され、魅力的なスポットとして生まれ変わったのである。

ノマド村の活動方針には、「地域の人々や国内外からの参加者、訪問者たちと、共にこの場を作り上げる、ソーシャル・スカルプチャー（社会彫刻）として活動する」[*3]と記されている。世界を視野に地域に根ざして、アーティストという立場で、地域や社会が抱えている問題をみんなで変えていこうとする意志が伝わってくる。

感動を与えてくれるだけがアートではない。忙しい日常の中で見逃してしまいそうになる問題や、真正面から挑むにはあまりにも大きすぎて思考停止しているような問題、そういうものを改めて気づかせてくれ、時には解決に向けてのなにがしかのヒントを与えてくれるのもアートである。

淡路島の各所でアーティストが開くカフェやギャラリー。発想や表現方法はそれぞれだが、集う人々や地域を巻き込んで地域を元気にしていくアーティストたち。

今後は、それぞれアーティストがどのように地域の人々とかかわり活動を行っているのか、さらに調査を進める予定である。

---

*3 http://www.nomadomura.net/nomadomura.html

あとがき

明石海峡大橋がなかったころ、岩屋から明石へ渡るフェリーボートの待ち時間は、帰省ラッシュになると、3～4時間はざらだったという。橋が開通すると劇的に便利となった。しかし、気分としては陸続きというところまではいかない。島内の移動手段は自家用車かバスだ。東京23区ほどの面積を持つ淡路島をあちこち移動するにはクルマでなければ実質不可能だ。そこでネックとなるのが往復５０００円近くになる橋を渡るための通行料だ。

行こうと思えばいつでも行ける。しかし、気軽には行けない。この微妙さがフィルターとなって、結果としてアーティストにとって淡路島がいごごちのいい場所になっているのではないか。

日本画家の堀文子は、「芸術はつくるものではなく、植物が生えるようにその土地から生まれ」、「美は暮らしの中に累積していく*」と語っている。

日々の暮らしを味わって生きることができる淡路島、そこから生まれるアートにこれからも注目していきたいと思う。

最後に、ご協力いただいた皆様、お忙しい中、要領を得ない学生たちの問いかけに、丁寧にお答えいただきまして、誠にありがとうございました。また雑事にかまけて編集作業が遅れ、出版が遅くなり、お詫び申し上げます。

*人生の贈りもの 朝日新聞（2012-1-26）

ご協力いただいた方々（敬称略）

・宇田賀 織絵
・岡本 純一
・尾崎 泰弘
・西村 昌晃
・前川 和昭
・前川 温子
・茂木 綾子
・やまぐち くにこ
・遊木 真帆

制作

●編著&撮影
桑島 紳二

●インタビュー&撮影
亀谷 弥生
河野 祥平
古賀 まりあ
小巻 美空
杉村 亜由美
谷口 和弘
佃 駿介
筒井 洸太郎
日沖 紗也香
松下 裕貴
松田 浩典
眞鍋 大樹
三宅 礼夏
森下 奈津子
横田 康平

※神戸学院大学人文学部
芸術環境論実習Ⅱ（2011年前期）の受講生

●レイアウト・デザイン
隠岐 寿子

●印刷
梅田印刷株式会社

発行
2012年4月20日

発行所
神戸学院大学地域研究センター
〒651-2180　兵庫県神戸市西区伊川谷町有瀬518
tel.078（974）1551

本報告書は「文部科学省　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業　地域研究プロジェクト」による調査研究に基づいたものである。

淡路島のアーティストに話を聞く。

神戸学院大学地域研究センター

文部科学省　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業　地域研究プロジェクト